

NetBackup Self Service 構成ガイド

7.7.3

マニュアルバージョン: 1

Veritas NetBackup Self Service 構成ガイド

マニュアルバージョン: 7.7.3

法的通知と登録商標

Copyright © 2016 Veritas Technologies LLC. All rights reserved.

Veritas、Veritas ロゴ、NetBackup は Veritas Technologies LLC または同社の米国とその他の国における関連会社の商標または登録商標です。その他の会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。

この製品には、サードパーティ（「サードパーティプログラム」）の所有物であることをベリタスが示す必要のあるサードパーティソフトウェアが含まれている場合があります。サードパーティプログラムの一部は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスで提供されます。本ソフトウェアに含まれる本使用許諾契約は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスでお客様が有する権利または義務を変更しないものとします。このベリタス製品に付属するサードパーティの法的通知文書は次の場所で入手できます。

<https://www.veritas.com/about/legal/license-agreements>

本書に記載されている製品は、その使用、コピー、頒布、逆コンパイルおよびリバースエンジニアリングを制限するライセンスに基づいて頒布されます。Veritas Technologies LLC からの書面による許可なく本書を複製することはできません。

本書は、現状のまま提供されるものであり、その商品性、特定目的への適合性、または不侵害の暗黙的な保証を含む、明示的あるいは暗黙的な条件、表明、および保証はすべて免責されるものとします。ただし、これらの免責が法的に無効であるとされる場合を除きます。Veritas Technologies LLC は、本書の提供、内容の実施、また本書の利用によって偶発的あるいは必然的に生じる損害については責任を負わないものとします。本書に記載の情報は、予告なく変更される場合があります。

ライセンス対象ソフトウェアおよび資料は、FAR 12.212 の規定によって商業用コンピュータソフトウェアと見なされ、場合に応じて、FAR 52.227-19「Commercial Computer Software - Restricted Rights」、DFARS 227.7202、「Commercial Computer Software and Commercial Computer Software Documentation」、その後継規制の規定により制限された権利の対象となります。業務用またはホスト対象サービスとしてベリタスによって提供されている場合でも同様です。米国政府によるライセンス対象ソフトウェアおよび資料の使用、修正、複製のリリース、実演、表示または開示は、本使用許諾契約の条項に従ってのみ行われるものとします。

Veritas Technologies LLC
500 E Middlefield Road
Mountain View, CA 94043

<http://www.veritas.com>

テクニカルサポート

テクニカルサポートは世界中にサポートセンターを設けています。すべてのサポートサービスは、お客様のサポート契約およびその時点でのエンタープライズテクニカルサポートポリシーに従って提供

されます。サポートサービスとテクニカルサポートへの問い合わせ方法については、次の弊社の Web サイトにアクセスしてください。

https://www.veritas.com/support/ja_JP.html

次の URL でベリタスアカウントの情報を管理できます。

<https://my.veritas.com>

既存のサポート契約に関する質問については、次に示す地域のサポート契約管理チームに電子メールでお問い合わせください。

世界全域 (日本を除く)

CustomerCare@veritas.com

Japan (日本)

CustomerCare_Japan@veritas.com

マニュアル

最新のマニュアルは、次のベリタス Web サイトで入手できます。

<https://sort.veritas.com/documents>

マニュアルに対するご意見

お客様のご意見は弊社の財産です。改善点のご指摘やマニュアルの誤謬脱漏などの報告をお願いします。その際には、マニュアルのタイトル、バージョン、章タイトル、セクションタイトルも合わせてご報告ください。ご意見は次のアドレスに送信してください。

NB.docs@veritas.com

次のベリタスコミュニティサイトでマニュアルの情報を参照したり、質問することもできます。

<http://www.veritas.com/community/ja>

Veritas SORT (Services and Operations Readiness Tools)

Veritas SORT (Services and Operations Readiness Tools) は、時間のかかる特定の管理タスクを自動化および単純化するための情報とツールを提供する Web サイトです。製品に応じて、SORT はインストールとアップグレードの準備、データセンターのリスクの識別、効率性の改善に役立ちます。使用している製品に対して SORT が提供しているサービスおよびツールについては、次のデータシートを参照してください。

https://sort.veritas.com/data/support/SORT_Data_Sheet.pdf

目次

第 1 章	ライセンス	7
	フルライセンスの適用	7
第 2 章	Self Service ソリューションの構成	8
	Self Service ソリューションの構成について	8
	Self Service スケジュールされたバックアップ	9
	構成のチェックリスト	9
第 3 章	NetBackup マスターサーバーの構成	11
	NetBackup マスターサーバーの構成について	11
	Windows NetBackup マスターサーバーとの通信の有効化	12
	UNIX NetBackup マスターサーバーとの通信の有効化	12
	NetBackup アプライアンスとの通信の有効化	14
	NetBackup テンプレートポリシーの作成	14
第 4 章	Self Service の構成	17
	Self Service 構成について	17
	統合設定について	18
	場所の構成	18
	保護の設定	20
	[今すぐバックアップ (Backup Now)]の保持レベルの設定	24
	テナントの構成	24
	アクセス権	26
	コンピュータの登録	28
	ホームページの構成	31
	ホームページの統合設定	31
第 5 章	Self Service のカスタマイズ	35
	言語設定	35
	リクエストフォームの作成またはカスタマイズ	35
	テーマ	36
	通知	37

第 6 章	ユーザー認証方法	38
	ユーザー認証方法について	38
	フォームベース認証	38
	Windows 認証	39
	Active Directory のインポート	39
	フェデレーションシングルサインオンを使用するための Self Service の設定	40
第 7 章	トラブルシューティング	43
	トラブルシューティングについて	43
	トラブルシューティング情報の参照場所	44
	テナントユーザーの偽装	46
	リモート PowerShell から Windows マスターサーバーまでの問題	46
付録 A	NetBackup ポリシータイプ	50
	NetBackup ポリシー形式のリスト	50
付録 B	ダッシュボード交通信号ステータスおよび使用状況	53
	ダッシュボードの信号機の状態と使用方法について	53
	保護形式を設定したコンピュータ	53
	保護形式が設定されていないコンピュータ	54
	使用方法	54
付録 C	NetBackup からのデータの同期	55
	NetBackup からのデータの同期について	55
付録 D	NetBackup Self Service データキャッシュプロセス	57
	NetBackup Self Serviceのデータキャッシュ処理	57
	NetBackup データの同期	58
	今すぐバックアップ	59
	コンピュータの保護	59
	コンピュータを保護解除	59
付録 E	統合設定	60
	統合設定について	60
	NetBackup Adapter	61

	NetBackup Adapter 使用方法	62
	NetBackup Adapter アクセス権限	63
	アクションリクエストタイプ	64
	NetBackup 場所	65
	vCloud Director のインポート	68
付録 F	REST API	69
	REST API について	69
付録 G	用語集	70
	用語集	70

ライセンス

この章では以下の項目について説明しています。

- [フルライセンスの適用](#)

フルライセンスの適用

NetBackup Self Service 7.7.3 には、60 日間の試用ライセンスが標準装備されております。実働ライセンスは、お客様サポートチームから使用可能です。

ライセンスを適用するには、NetBackup Self Service ポータルにアクセスします。[管理 (Admin)]>[設定]>[ライセンス]>[ライセンスキーの更新 (Update License Key)]の順にを選択します。新しいライセンスキーをコピーアンドペーストします。ライセンスキーを適用したら、Windows サービスを再起動します。アプリケーションがサーバーファーム環境で実行される場合、すべてのアプリケーションプールを再起動する必要があります。

[ライセンス]ページで、ページ上部のメッセージにその他の機能が含まれていないことが報告されます。ただし、完全に構成された NetBackup Self Service ソリューションの操作に必要なすべての機能は含まれています。

メモ: 前提条件および要件についての追加情報を参照できます。詳細については、『NetBackup Self Service インストールガイド』を参照してください。

Self Service ソリューションの構成

この章では以下の項目について説明しています。

- [Self Service ソリューションの構成について](#)
- [Self Service スケジュールされたバックアップ](#)
- [構成のチェックリスト](#)

Self Service ソリューションの構成について

NetBackup Self Service を使用すると、サービスプロバイダは複数の顧客に対し安全かつ分割された方法でセルフサービスのバックアップおよびリストアを提供できるようになります。企業環境では、事業単位およびプロジェクトチームはセルフサービスのバックアップおよびリストアを実行できます。

Self Service リストア機能は有効になっていますが、さらにオンデマンドの今すぐバックアップ機能に対しスケジュールされているセルフサービスのポリシー編集およびサポートを提供することもできます。

注意: NetBackup Self Service に入力される構成データはすべて大文字と小文字が区別されます。NetBackup. で保持される関連データと一致する必要があります。

Self Service ソリューションでは、コンピュータとその所有者のインベントリがサポートされません。

コンピュータインベントリは複数の方法で入力できます。

- ソース非依存 API
- Self Service ポータル

■ vCloud Director からのインポート

Self Service では、多くの NetBackup ポリシータイプがサポートされています。Self Service を使用して、テナントのバックアップのニーズのすべてを管理できます。このオプションでは、テナントは独自のバックアップポリシーを作成できます。または、リストアサービスが手動で保持されるバックアップポリシーに基づいて提供されるように Self Service を構成することもできます。

Windows、UNIX、VMware など、登録されたコンピュータおよびその保護形式の記録は、Self Service 内に保持されます。

テナントユーザーは、コンピュータ保護ステータスおよび使用状況を一式のダッシュボード機能を使用して管理します。テナントユーザーは、保護およびリストアへの変更を作成できます。

Self Service スケジュールされたバックアップ

保護を構成すると、ユーザーは自分のバックアップスケジュールを管理できるようになります。このオプションでは、NetBackup ポリシー構成からの抽出が提供され、ユーザーが選択できる精選された一連のバックアップスケジュールが示されます。

構成のチェックリスト

表 2-1 は、初めて Self Service を構成するための推奨される一連の手順を示します。

表 2-1 構成のチェックリスト

場所	アクティビティ
サーバー	NetBackup Self Service ポータルをインストールします (『NetBackup Self Service 7.7.3 インストールガイド』を参照)
	NetBackup Self Service アダプタをインストールします (『NetBackup Self Service 7.7.3 インストールガイド』を参照)
	Windows マスターサーバーに対しリモート PowerShell を構成します
	UNIX マスターサーバーに対し SSH を構成します
ポータル	場所を少なくとも 1 つ作成します
	保護形式を少なくとも 1 つ作成します (必要に応じて)
NetBackup マスターサーバー	テンプレートポリシーを作成します

場所	アクティビティ
ポータル	ユーザーインターフェースを使用してテナントを作成します
	ユーザーインターフェース、API、または vCloud Director インポートを使用してコンピュータを少なくとも 1 つ登録します
	今すぐバックアップリクエストを送信します

NetBackup マスターサーバーの構成

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup マスターサーバーの構成について](#)
- [Windows NetBackup マスターサーバーとの通信の有効化](#)
- [UNIX NetBackup マスターサーバーとの通信の有効化](#)
- [NetBackup アプライアンスとの通信の有効化](#)
- [NetBackup テンプレートポリシーの作成](#)

NetBackup マスターサーバーの構成について

最小要件は、最新のサービスパックを含む NetBackup 7.6.1 です。

システムとの通信が必要な各 NetBackup マスターサーバーを[場所]として構成する必要があります。場所を管理するには、管理ユーザーとして Self Service ポータルにログインしてから、ホームページ上の[場所]タブに移動します。

メモ: vCloud Director 統合構成を使用する場合、NetBackup Self Service を有効にする前に NetBackup を vCloud Director に対して構成する必要があります。VMware vCloud Director では、少なくとも API バージョン 5.1. がサポートされている必要があります。

Windows NetBackup マスターサーバーとの通信の有効化

NetBackup Self Service では、Windows NetBackup マスターサーバーとの通信に Windows PowerShell リモータリングが使用されます。Windows PowerShell はマスターサーバーにインストールされている必要があります。Windows PowerShell は通常、デフォルトでインストールされています。また、PowerShell リモータリングが有効になっている必要があります。詳細情報が利用可能です。

<http://technet.microsoft.com/library/hh847859.aspx>

Windows NetBackup マスターサーバーとの通信を有効にするには

- 1 NetBackup マスターサーバーにログオンします。
- 2 管理者として Windows PowerShell ウィンドウを起動します。
- 3 `Enable-PSRemoting -Force` を実行します。
- 4 必要なファイアウォールポートを開きます。

デフォルトで、PowerShell リモータリングではポート 5985 上の HTTP、またはポート 5986 上の HTTPS が使用されます。

詳細情報が利用可能です。

<http://technet.microsoft.com/en-us/magazine/ff700227.aspx>

Self Service サーバーからのマスターサーバーとの通信が信頼されているドメインアカウントとの通信でない場合、認証されないことがあります。認証を有効にするには、リモートコンピュータを WinRM のローカルコンピュータの信頼されているホストのリストに追加する必要があります。これを実行するには、次のように入力します。

```
winrm set winrm/config/client '@{TrustedHosts="machine1,machine2"}'
```

必要に応じて、カンマで区切られたリストで追加のコンピュータを追加します。

最初の[場所]を作成した場合の接続のテストについての詳細を参照できます。

p.18 の「場所の構成」を参照してください。

UNIX NetBackup マスターサーバーとの通信の有効化

NetBackup Self Service では、UNIX NetBackup マスターサーバーとの通信に SSH (Secure Shell) が使用されます。SSH の構成は、このガイドの範囲外となります。ただし、NetBackup Self Service では、マスターサーバー上の SSH サーバーとの通信に資格情報が必要です。

- デフォルトで、SSH ではポート 22 が使用されます。

別のポートを指定するには、サーバー名を `server_name:port_number` に設定します。たとえば、`MyServer:23` です。

- マスターサーバー上の **SSH** へのログオンに **NetBackup Self Service** で使用されるユーザーアカウントには、`sudo` 構成が必要です。
 - ユーザーアカウントでは `requiretty` を使用しないでください。
 - ユーザーアカウントでは `sudo` パスワードを要求しないでください。
 - `sudo` を使用する場合、ユーザーアカウントでは `/usr/opensv/netbackup/bin` および `/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd` のすべてのコマンドが実行される必要があります。

サポートされているユーザー認証モードは次のとおりです。

- パスワード
NetBackup Self Service ではログオン時にユーザー名とパスワードが渡されます。
- 公開鍵
ユーザーの公開鍵は、マスターサーバー上のユーザーに対し `authorized_keys` に保存されます。ユーザーの秘密鍵は、**OpenSSH** 形式で **NetBackup Self Service** ポータルに保存されます。
- キーボードインタラクティブ
NetBackup Self Service では、ユーザーのパスワードがキーボードインタラクティブ `ssh` セッションに送信されます。パスワードは、構成可能なパスワードプロンプトに応じて送信されます。デフォルトのパスワードプロンプトは `[Password:]` です。

公開鍵認証に対し、**NetBackup Self Service** および **NetBackup** マスターサーバーを構成するには

- 1 PuTTYgen などのキージェネレータを使用して、公開鍵と秘密鍵のペアを作成します。
- 2 必要なマスターサーバーユーザーとしてマスターサーバーにログオンします
- 3 公開鍵をユーザーの `authorized_keys` ファイルにマスターサーバーのオペレーティングシステム形式で追加します。

4 秘密鍵をパスフレーズで暗号化された OpenSSH 形式に変換します

```
-----BEGIN RSA PRIVATE KEY-----  
Proc-Type: 4, ENCRYPTED  
DEK-Info: DES-EDE3-CBC, 997295A8E365412F  
  
SIKdyjX4UoDm03kprqfkCGQYc/thmNlWYztEomjyRaMyEYlh0ZIC9Kx7XnMnSk  
...  
MUxIcZW8d8fF3P4s+OLidxG03H6C/AsGLzJtpecjPQA=  
-----END RSA PRIVATE KEY-----
```

5 NetBackup Self Service で場所を作成した場合:

- 認証のための[公開鍵]を選択します。
- [ユーザーアカウント]に、マスターサーバーに接続するユーザーアカウントを入力します。
- [OpenSSH 公開鍵 (OpenSSH Private Key)]に暗号化された OpenSSH 形式の秘密鍵を貼り付けます。
- [パスワード]と[パスワードの確認]にパスフレーズを入力します。

最初の[場所]を作成した場合の接続のテストについての詳細を参照できます。

p.18 の「[場所の構成](#)」を参照してください。

NetBackup アプライアンスとの通信の有効化

アプライアンスへの接続は、UNIX マスターサーバーへの接続と同様に構成されますが、キーの構成は使用できません。前に作成したユーザー名とパスワードを使用して、接続を行います。

アプライアンスでシェルメニューにログオンし、新しいユーザーを作成します。

[メインメニュー (Main_Menu)]>[管理 (Manage)]> [NetBackupCLI] > [UserName の作成]の順

詳しくは、『NetBackup Appliance Administrator's Guide』の「Creating NetBackup administrator user accounts (NetBackup 管理者ユーザーアカウントの作成)」を参照してください。

NetBackup テンプレートポリシーの作成

NetBackup ポリシーの作成時には、多くのオプションを使用できます。『NetBackup 管理者ガイドボリューム I』には、バックアップポリシー作成に関するすべての章が含まれて

います。バックアップポリシー作成について詳しくは、そのマニュアルを参照してください。

Self Service テンプレートポリシーでは、すべての **NetBackup** ポリシーオプションが使用されないようにしてください。スケジュールされたポリシーの場合、表 3-1 で指定されている情報は **Self Service** に影響する唯一の項目です。その他の **NetBackup** ポリシーを構成する場合は、その他すべてのポリシーデータを構成する必要があります。表 3-1 には、**NetBackup** ポリシー作成画面の関連タブ、および **Self Service** テンプレートポリシーに必要な対応する情報が詳述されています。**NetBackup** ポリシーの作成方法について詳しくは、『**NetBackup 管理者ガイド**ボリューム 1』を参照してください。

表 3-1 スケジュールされたポリシーと今すぐバックアップするポリシーに必要なポリシー情報

NetBackup ポリシータブ	適用可能なテンプレートポリシー	追加詳細
属性	今すぐバックアップおよびスケジュールされたバックアップ	<ul style="list-style-type: none"> ■ ポリシーを無効化する必要があります。 ■ ストレージオプションを指定する場合、すべてのデータを正常にバックアップするために十分な大きさのものを指定してください。
スケジュール	今すぐバックアップのみ	<ul style="list-style-type: none"> ■ [デフォルト]という名前のスケジュールがある必要があります。 ■ Self Service では、NetBackup ポリシーで設定される保持値は使用されません。ポリシーの作成時は、Self Service では[デフォルト]スケジュールの保持レベルが更新されます。 ■ スケジュールを自動的に実行されるように設定しないでください。
クライアント	今すぐバックアップおよびスケジュールされたバックアップ	<ul style="list-style-type: none"> ■ NetBackup Self Service ではクライアント情報が追加されるため、このフィールドは空白にしておきます。

テンプレートポリシーは、ソリューションに対して特に作成する必要があるマスターサーバー上の無効なポリシーです。これらは、保護レベルを使用する場合、または今すぐバックアップ機能を提供する場合のみ必要です。

マスターサーバー上でポリシーの作成を必要とするアクションをユーザーが実行する場合、関連するテンプレートがコピーされ、テナント固有のポリシーが作成されます。ポリシーは、ユーザーのアクションに応じて変更されます。

テンプレートポリシーは、場所として構成されるすべてのマスターサーバー上で作成する必要があります。これらのポリシーの命名規則では大文字と小文字が区別され、すべて無効にマークされる必要があります。

ポリシー形式

NetBackup のポリシー形式コード。たとえば、標準の場合は 0、**Windows** の場合は 13、**VMware** の場合は 40 となります。

NetBackup ポリシー形式の詳細を参照できます。

p.50 の「[NetBackup ポリシー形式のリスト](#)」を参照してください。

任意の形式 40 (VMware) テンプレートポリシーの場合:

- [VMware] タブで、プライマリ仮想マシン ID が[VM 表示名]である必要があります。
- 今すぐバックアップポリシーの[クライアント]タブで、仮想マシン選択が[VMware インテリジェントポリシーの問い合わせを通じて自動的に選択]に設定されている必要があります。
- vCloud Director テンプレートポリシーの場合、[クライアント]タブの[仮想マシンの選択]で [vCloud Director 統合の有効化]を指定する必要があります。

今すぐバックアップテンプレートポリシー

NetBackup Self Service は、今すぐバックアップポリシーに対してデフォルトの NetBackup 保持レベルが使用されるように最初から構成されています。これらが NetBackup で変更される、または異なる保持レベルがユーザーに提供される場合、変更は NetBackup Self Service ポータルで行う必要があります。今すぐバックアップ保持レベルについての詳しい情報を参照できます。

p.24 の「[\[今すぐバックアップ \(Backup Now\)\]の保持レベルの設定](#)」を参照してください。

形式 40 (VMware) 今すぐバックアップテンプレートポリシー

今すぐバックアップテンプレートポリシーの場合、[クライアント]タブの[VM 選択の問い合わせ結果の再利用]の値に関して考慮が必要になります。値をデフォルトの 8 時間のままにしておくと、過去 8 時間以内に作成された仮想マシンで実行される今すぐバックアップアクションが失敗する可能性があります。値をそれより少ない時間、または 0 時間に設定すると、操作は成功することがあります。ただし、この変更により全体のキャッシュが再構築されるため、接続している VMware システムのパフォーマンスに悪影響を与える可能性があります。この値は、システムの予測される使用状況によっては、デフォルトの 8 時間から変更をする必要とすることがあります。

Self Service の構成

この章では以下の項目について説明しています。

- [Self Service 構成について](#)
- [統合設定について](#)
- [場所の構成](#)
- [保護の設定](#)
- [\[今すぐバックアップ \(Backup Now\)\]の保持レベルの設定](#)
- [テナントの構成](#)
- [アクセス権](#)
- [コンピュータの登録](#)
- [ホームページの構成](#)

Self Service 構成について

鍵作成および構成タスクの編集は、ホームページのメインパネルから管理できます。

- [場所](#)
- [保護](#)
- [テナント](#)
- [コンピュータ](#)

非テナント関連の管理者はこのホームページパネルを表示できます。

統合設定について

統合設定は、値を含む名前付き設定のフレキシブルなストアです。これらは **Self Service** の統合部分です。管理者としてすべての統合設定にアクセスするには、[管理 (Admin)] > [設定] > [統合設定] の順に選択します。

設定はセクションにグループ化されます。場所および **vCloud Director** インポートが 1 つのセクションにグループ化される統合設定として **Self Service** に存在します。単一のセクションにより、個別の場所および **vCloud Director** インポートがそれぞれ定義されます。それぞれに追加機能を使用する場合、統合設定がバックグラウンドで作成されます。

これらは [統合設定] でのみ編集または削除できます。ただし、[統合設定] で直接値を編集する場合は、検証は実行されないため、注意が必要です。

場所の構成

場所は、**NetBackup** マスターサーバーへの接続を示します。少なくとも 1 つの場所が機能する必要があります。

新しい場所は、ホームページの [場所] タブの [場所を追加] で作成されます。画面に表示されるプロンプトを完了する必要があります。[場所] 統合設定セクションが作成されます。

場所が作成されると、メインの [場所] タブに戻り、そこで接続性チェックが実行されます。[接続性をチェックする] アイコンの動く緑色の歯車は、接続性チェックが開始されたことを示します。

チェックが完了すると、新しい場所が緑色のチェックマーク (合格)、または赤いバツ印 (不合格) とともに表示されます。

チェックに合格すると、以降のアクションは不要になり、場所が使用できるようになります。チェックが不合格になった場合、赤いバツ印をクリックすると不合格の詳細が表示されます。

場所で使用される統合設定

これらの設定は、テナントまたはユーザーレベルで上書きすることはできません。

さらに、場所を形成するセクション名の形式は **NetBackup Location abc** である必要があります。**abc** は場所の名前です。コンピュータが場所に追加されたら、その場所の名前を変更しないでください。場所の名前を変更すると、コンピュータが場所から切り離される可能性があります。

表 4-1 場所の統合設定

項目	詳細
NetBackup サーバー	この場所用 NetBackup マスターサーバー
オンライン	マスターサーバーがオンラインとみなされるかどうかを示します。オンラインでない場所では使用されません。ユーザーはブロックされ、場所に影響するアクションを行うことができなくなります。計画メンテナンスまたは停止の場合に使用されます。
NetBackup ユーザー名	NetBackup マスターサーバーに接続するユーザー名。
NetBackup パスワード	NetBackup サーバーへの接続に使用されるパスワード。公開鍵認証を使用している場合、このパスワードはユーザーの秘密鍵を解読するためのパスフレーズとして使用されます。
NetBackup OS	NetBackup サーバーのオペレーティングシステム。
NetBackup フォルダ	NetBackup コマンドがインストールされている NetBackup マスターサーバー上の場所。デフォルトの値は次のとおりです。 C:¥Program Files¥Veritas¥NetBackup (Windows の場合) /usr/opensv/netbackup (UNIX の場合)
NetBackup タイムゾーン	すべての NetBackup サーバーおよび NetBackup Self Service サーバーのタイムゾーンが同じ場合、この設定を構成する必要はありません。 タイムゾーンを編集する必要がある場合、値を正しい Microsoft Time Zone ID に設定します。この ID は、ホームページの[場所を追加]の[サーバータイムゾーン (Server Time Zone)]ドロップダウンの[タイムゾーン]名に追加されています。
NetBackup 日付形式	マスターサーバーで日付が表示される形式を指定します。オプションについては、ポータル[場所を追加]を参照してください。
NetBackup 日付時刻形式	マスターサーバーで日付と時刻が表示される形式を指定します。オプションについては、ポータル[場所を追加]を参照してください。
NetBackup OpenSSH 鍵	SSH を使用した UNIX マスターサーバーへの接続用。鍵は OpenSSH 形式である必要があります。
NetBackup インタラクティブパスワードプロンプト	キーボードインタラクティブ認証を使用する場合の UNIX マスターサーバーへの接続用。この値は、サーバーでパスワードの入力が必要な場合に送信されるプロンプトと一致します。デフォルトの値は Password: です。

項目	詳細
NetBackup 使用 プール接続	Windows マスターサーバーのみ。デフォルトで有効になっており、通常使用の場合はそのまましておく必要があります。パフォーマンス向上のためマスターサーバーへの PowerShell 接続のプールを制御します。
NetBackup 最小 プールサイズ	Windows マスターサーバーのみ。サポート目的にのみ使用されます。
NetBackup 最大 プールサイズ	Windows マスターサーバーのみ。サポート目的にのみ使用されます。
時間単位のバック アップチャンクサイズ の取得	Self Service で NetBackupからのコンピュータバックアップイメージが同期される場合、イメージはこのサイズのバッチで取得されます。デフォルトは 25 ですが、多くのバックアップアクティビティがあるビジー状態のシステムの場合はその値を減らす必要があることがあります。数値を減らすと、指定された数のイメージを取得するために NetBackup への呼び出しが多くなります。取得されるイメージの合計数は同じままです。
最大バックアップ期 間 (時間)	NetBackup でバックアップジョブの完了が可能な最大時間数。同期エンジンでバックアップイメージを同期するバッファ期間を見積もるために使用されます。バックアップイメージ同期に問題が発生した場合にのみ変更する必要があります。
NetBackup 認証メ カニズム	Windows マスターサーバー: CredSSP (Credential Security Support Provider) 認証を有効にするには、[Default] または [Credssp] に設定します。 UNIX または Linux マスターサーバー: [Password]、[KeyboardInteractive]、または [PublicKey] に設定します。

保護の設定

保護形式では、ユーザーがコンピュータを保護できるすべての方法を定義します。すべてのコンピュータのバックアップ必要条件が似通っている場合、保護形式は 1 つしか必要ありません。一部のコンピュータに別の保護オプションを使用する場合は、各オプションに保護形式が必要です。さまざまな保護形式の例として、SQL サーバーまたは仮想マシンと物理コンピュータの混合を指定できます。原則として、サポートする NetBackup のポリシー形式はそれぞれに保護形式が必要です。

各保護形式で保護レベル数と[今すぐバックアップ (Backup Now)]のレベルを定義できます。これらの定義は、コンピュータを保護したり、コンピュータのバックアップを作成するときにユーザーに表示されるオプションです。これらのオプションを使用して、各種スケジュール、保持レベル、または NetBackup ポリシーで直接設定できるその他のオプションを設定できます。

各保護または[今すぐバックアップ (Backup Now)]のレベルに 1 つ以上のポリシーを定義します。これらのポリシーは、このレベルを選択するユーザーのためにマスターサーバーで作成するポリシーです。マスターサーバーでポリシーを作成する方法と指定する方法を定義します。

保護定義に変更を加えても NetBackup に自動的に適用されることはありません。この保護形式で保護されたコンピュータは更新されません。変更を加えた結果、異なるターゲットポリシーセットになると、既存のコンピュータの保護レベルは不明になります。この変更は黒色のチェックマークで示されます。各コンピュータまたはコンテナの不明な保護レベルポリシーを削除して、修正した保護レベルを再割り当てできます。

保護形式の作成

ホームページの[保護形式 (Protection Types)]タブで[追加 (Add)]を選択します。

表 4-2 保護形式の選択

項目	詳細
名前	保護形式を識別する名前。このオプションはユーザーには表示されません。
コード (Code)	保護形式に関連付けられた NetBackup ポリシーを作成するときに使用するコード。コードは、作成したポリシーの名前に含まれます。コードは一意にする必要があります。

保護レベルと[今すぐバックアップ (Backup Now)]レベルの作成

選択した保護形式で、関連する[追加 (Add)]オプションをクリックします。[名前 (Name)]、[説明 (Description)]、[色 (Color)]の各プロパティをすべて使用してユーザーのレベルを区別します。他の設定は機能を制御します。

表 4-3 保護レベルと[今すぐバックアップ (Backup Now)]レベルの設定

項目	詳細
名前	(ユーザーの) レベル名 (ユーザー用)。
コード (Code)	当該レベルに関連付けられた NetBackup ポリシーを作成するときに使用するコード。コードは、作成したポリシーの名前に含まれます。コードは保護形式内で一意にする必要があります。
説明	ユーザーがさまざまなレベルから選択するときに役立つ説明。

項目	詳細
色 (Color)	色は、さまざまなコンピュータに割り当てるさまざまなレベルを視覚的に区別するために、主にユーザー画面で使用します。
リクエストタイプコード (Request type code)	システムをカスタマイズする必要がなければデフォルト値 (保護レベルは DBNEWBACK、[今すぐバックアップ (Backup Now)]レベルは DBBACKNOW) のままにしてください。
表示 (Visible)	ユーザーに表示するレベルを制御します。

ポリシーの作成

[保護レベル (Protection Level)]または[今すぐバックアップのレベル (Backup Now Level)]の詳細で、[追加 (Add)]をクリックしてそのレベル内にポリシーを作成します。

[ポリシー (Policy)]で、そのポリシーの[コード (Code)]を設定できます。コードおよび親保護形式の組み合わせと保護レベルのコードで作成した[ターゲットポリシー名 (Target Policy Name)]も表示できます。

[テンプレート名 (Template Name)]にも入力する必要があります。

表 4-4 ポリシーの設定

項目	詳細
名前	管理にのみ使用します。ユーザーには表示されません。
すぐに実行 (Run Immediately)	[すぐに実行 (Run Immediately)]に設定したポリシーは、進行中のスケジュール済みポリシーに追加されるのではなく、1 回限りのバックアップとして実行されます。
コード (Code)	コードは、コードを設定するレベル内で一意である必要があります。レベル内に 1 つしかポリシーがない場合、コードは空白のままにできます。
ターゲットポリシー名 (Target Policy Name)	編集はできません。このフィールドには、ユーザーが当該レベルを選択したときにマスターサーバーで作成したターゲットポリシーの名前の例が表示されます。名前は、保護形式、レベル (保護レベルまたは[今すぐバックアップ (Backup Now)]、ポリシーコードの 3 つのコードから成ります。

項目	詳細
テンプレート名 (Template Name)	<p>ターゲットポリシーを作成するためにコピーする、マスターサーバーに存在するテンプレートポリシーの名前。次の 3 つのオプションを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [デフォルト (Default)]を選択すると、システム推奨のテンプレート名を使用します。 ■ [既存 (Existing)]を選択すると、現在利用可能なマスターサーバーの既存のポリシー名を使用できます。 ■ [カスタム (Custom)]を選択すると、自由にフォーム名を入力できます。 <p>詳細情報が利用可能です。</p> <p>p.14 の「NetBackup テンプレートポリシーの作成」を参照してください。</p>
ポリシー形式	<p>テンプレートポリシーの NetBackup ポリシー形式を指定する必要があります。</p>
警告 (時間) (Warning (hours))	<p>コンピュータの信号機の状態を計算する場合に使用します。詳細情報が利用可能です。</p> <p>p.53 の「ダッシュボードの信号機の状態と使用方法について」を参照してください。</p>

[今すぐバックアップ (Backup Now)]レベル内で作成したポリシーは、必ず[すぐに実行 (Run Immediately)]に設定します。[今すぐバックアップ (Backup Now)]ポリシーでは、[警告 (時間) (Warning (hours))]オプションは設定できません。保護レベルには、[すぐに実行 (Run Immediately)]以外のポリシーを 1 つ以上作成してユーザーが選択できるようにする必要があります。

レベル内の複数のポリシー

1 つのレベルに複数のポリシーを指定できます。たとえば、データベースとオペレーティングシステムの両方のバックアップを作成するポリシーでデータベースサーバーを保護します。このような設定における唯一の制限として、仮想マシンに影響を与えるポリシータイプを仮想マシン以外のポリシータイプと組み合わせることができません。そのため、SQL Server の保護レベルを作成する場合に MS-SQL-Server (15) と MS-Windows-NT (13) のポリシーを指定できます。MS-SQL-Server (15) と VMware (40) を組み合わせることはできません。

保護レベルと関連ポリシーを追加したら、[保護 (Protection)]タブで[更新 (Refresh)]をクリックします。この処理を行うと、当該データが NetBackup マスターサーバーのポリシーと合致します。[更新 (Refresh)]アイコンの歯車が緑色のアニメーションで表示されます。このように表示が変わったら、チェックはアクティブです。このチェックでは、システムで定

義済みの各場所で保護レベルに対応するテンプレートポリシーを確認します。不明なテンプレートポリシーは、画面に赤色の十字で表示されます。このアイコンをクリックすると、作成する必要があるテンプレートポリシーに関する詳細が表示されます。不明なテンプレートポリシーを作成したら、「更新」してポリシーが正しいことを確認できます。テンプレートポリシーの作成について詳しくは、「NetBackup テンプレートポリシーの作成」を参照してください。

p.14 の「NetBackup テンプレートポリシーの作成」を参照してください。

[今すぐバックアップ (Backup Now)]の保持レベルの設定

[今すぐバックアップ (Backup Now)]リクエストでは、NetBackup Self Service 事前インストール時のデフォルトの保持レベルを使用します。リクエストフォームを編集すると、ユーザーに提示する保持レベルを修正できます。

[今すぐバックアップ (Backup Now)]の保持レベルを設定するには

- 1 [管理 (Admin)]>[リクエストと承認 (Request & Approval)]>[リクエストタイプ (Request Type)]>[今すぐバックアップ (Backup Now) (DBBACKNOW)]の順に移動します。
- 2 [フォーム (Form)]タブをクリックしてから[バックアップ (Backup)]保持フィールドをクリックします。
- 3 ページの下部にある[構成 (Configuration)]タブをクリックします。
- 4 [項目 (Items)]フィールドに、[今すぐバックアップ (Backup Now)]リクエストフォームに入力可能な保持レベルのリストが表示されます。

ごみ箱アイコンを使用して既存のレベルを削除したり、新しいレベルを追加したりできます。コードは NetBackup 保持数と合致する必要があり、説明が表示されます。

テナントの構成

テナントは組織単位で、少なくとも 1 つのテナントが存在する必要があります。テナントを作成するには、ホームページの[テナント]タブの[テナントを追加]ボタンを使用します。テナントの最初の (管理者レベル) ユーザーが同時に作成されます。vCloud Director インポートソースが定義されている場合、テナントの資格情報を設定できます。[OK]をクリックすると、テナントレコード、関連するテナント統合設定、およびユーザーレコードがデータベースに追加されます。

テナントの詳細を編集するには、[管理 (Admin)]>[組織]>[テナント]の順にを選択します。テナント作成時に設定されるテナントの [顧客コード]を[詳細]タブで表示できます。テナントに関連付けられているすべてのユーザーを[ユーザー]タブで表示できます。テナントレベル統合設定は、[統合]タブで使用可能です。vCloud Director 資格情報および

び追加の vCloud Director インポートもここで設定できます。テナント管理者は、ホームページ vCloud Director インフラストラクチャツリービューノードの変更機能を使用して、更新された vCloud Director パスワードを必要に応じて続いて設定できます。テナントレベルのテーマは、[テーマ (Themes)] タブで実行できます。

API を使用してテナントを作成することもできます。テナントおよびそのユーザーの作成を自動化するための開始点として PowerShell スクリプトが提供されています。ここでは Front Office SDK を使用して、パブリック Web サービスを呼び出します。

SDK について詳しくは、ヘルプファイルが参照できます。ヘルプファイルは、NetBackup Self Service ポータルのインストール場所にあります。デフォルトで、ファイルは C:\Program Files (x86)\Biomni\Front Office 8.5\Sdk\ に置かれます。

Microsoft 開発者は SDK を使用する必要があります。Microsoft 以外の開発者は Web サービスを直接呼び出すことができます。URL は、[管理 (Admin)] > [サポート] > [構成チェック (Configuration Check)] の順に移動し [サーバー] タブのパブリック Web サービスセクションにあります。Web サービスは DirectaApi.svc です。

注意: テナントをポータル管理セクションで直接作成しないでください。([管理 (Admin)] > [組織] > [テナントを追加] の順) で直接作成しないでください。この画面からテナントを作成すると、必要な Self Service データのすべてが作成されません。テナントを [テナントを追加] フォーム (ホームページ上にある) から作成するか、API を使用します。

テナントの無効化

テナントを無効化するには:

- 1 [管理 (Admin)] > [組織] > [テナント] の順に移動します。
- 2 テナントを無効化します。

エントリページからの特定のテナント行の右側にある [無効化 (Deactivate)] リンクを使用してテナントを無効化します。または、テナントレコードの [アクティブ] のチェックボックスのチェックを外して、[詳細] タブからテナントを無効化します。

このアクションによりテナントユーザーがログオンできなくなります。

- 3 すべてのコンピュータ、バックアップ、保護、および使用状況データが Self Service データベースに保持されます。
- 4 NetBackup のテナントのすべてのポリシーを削除します。

ポリシーを特定するには、無効化されたテナントの顧客コードで始まるポリシーを確認します。

ユーザーの追加

追加のユーザーをテナントに追加するには、多くの方法があります。

- [管理 (Admin)] > [組織] > [テナント] > [ユーザー] タブに移動し、手動でポータルを使用して手動で

- **Active Directory** ([管理 (Admin)]>[組織]>[ユーザー]の順にを選択し、[Active Directory のインポート (Import Active Directory)]を右クリックする)。コストセンターコードは、テナントレコードのものと同じである必要があります。
- **CSV を使用したマスターデータインポート** ([管理 (Admin)]>[組織]>[ユーザー]の順にを選択し、[ユーザーのインポート/エクスポート (Import / Export Users)]を右クリックし、[ファイルテンプレートのインポート (Import File Template)]の[ユーザー]タブを使用)。コストセンターコードは、テナントレコードのものと同じである必要があります。
- **API の使用**

メモ: ユーザーがテナントに関連付けられると、この関連付けは変更できません。

ユーザーレコードを無効化して、システムにアクセスできないようにすることができます。フォーム認証を使用している場合、多くの基準を使用してパスワードルールを定義できます。これらのルールは、[管理 (Admin)]>[設定]>[システム構成]の順で構成できます。

Administrator アクセスプロファイルを持つテナントユーザーは、独自のユーザーレコードを管理できます。

アクセス権

デフォルトでは、すべてのユーザーはテナントに登録しているすべてのコンピュータで可能な処理すべてを実行できます。使用できる機能は、コンピュータがサポートする機能によって異なります。すべてのユーザーはテナントのデータ使用量を月ごとに表示できます。利用可能な処理は、全体、テナント単位、ユーザー単位の3つのレベルで制御できます。

これらのアクセス権の制御は、[NetBackup Adapter のアクセス権 (NetBackup Adapter Access Rights)]セクションで[管理 (Admin)]、[設定 (Settings)]、[統合設定 (Integration Settings)]の順に選択して設定します。アクセス権には、[今すぐバックアップを許可 (Allow Backup Now)]、[マシンの保護を許可 (Allow Protect Machine)]、[ファイルのリストアを許可 (Allow Restore File)]、[VM のリストアを許可 (Allow Restore Vm)]、[マシンの保護解除を許可 (Allow Unprotect Machine)]、[ファイルリストアの登録を許可 (Allow Register for File Restore)]、[保護の登録を許可 (Allow Register for Protection)]、[SQL のリストアを許可 (Allow Restore SQL)]、[Oracle のリストアを許可 (Allow Restore Oracle)]、[使用状況レポートを許可 (Allow Usage Report)]があります。

すべてのユーザーの処理を全体的に有効または無効にするには

- 1 [NetBackup Adapter のアクセス権 (NetBackup Adapter Access Rights)]セクションで必要なアクセス権をクリックします。
- 2 [値 (Value)]フィールドで[有効 (Enabled)]または[無効 (Disabled)]を選択します。
[テナントの上書きを許可 (Allow Tenant Override)]にチェックマークを付けていないことを確認します。
[ユーザーの上書きを許可 (Allow User Override)]を[(不許可しない)]に設定していることを確認します。
- 3 さまざまなテナントでさまざまな処理を実行できるようにするには、次の操作をします。
 - [NetBackup Adapter のアクセス権 (NetBackup Adapter Access Rights)]セクションで必要なアクセス権をクリックします。
 - [値 (Value)]フィールドで[有効 (Enabled)]または[無効 (Disabled)]を選択します。この設定は、既存のテナントでも新しいテナントでもデフォルトの設定です。
 - [テナントの上書きを許可 (Allow Tenant Override)]にチェックマークを付けます。
[ユーザーの上書きを許可 (Allow User Override)]を[(不許可しない (None))]に設定していることを確認します。

すべてのテナントにアクセスできる、テナント以外に関連付けられた管理者のみがこの値を変更できます。

各テナントにアクセス権の値を設定するには

- 1 [テナント管理 (Tenant Admin)]画面で[統合 (Integration)]タブを選択します。
- 2 [管理 (Admin)]、[所属 (Organization)]、[テナント (Tenant)]、[統合 (Integration)]の順に選択します。
- 3 [NetBackup Adapter のアクセス権 (NetBackup Adapter Access Rights)]セクションで必要なアクセス権をクリックします。
- 4 [値 (Value)]フィールドで[有効 (Enabled)]または[無効 (Disabled)]を選択します。

さまざまなユーザーがさまざまな処理を実行できるようにするには

- 1 [NetBackup Adapter のアクセス権 (NetBackup Adapter Access Rights)]セクションで必要なアクセス権をクリックします。
- 2 [値 (Value)]フィールドで[有効 (Enabled)]または[無効 (Disabled)]を選択します。この設定は、既存のユーザーでも新しいユーザーでもデフォルトの設定です。

- 3 [テナントの上書きを許可 (Allow Tenant Override)]にチェックマークを付けていないことを確認します。
- 4 [ユーザーの上書きを許可 (Allow User Override)]を[管理者が代行 (For User)]に設定します。

[管理者が代行 (For User)]の上書きを選択した場合は、次の場所で値を変更できます。

- [ユーザー管理 (User Administration)]の[統合 (Integration)]タブ ([管理 (Admin)]、[所属 (Organization)]、[ユーザー (User)]、[統合 (Integration)]の順に選択) で管理者ユーザーが変更
- [テナントユーザー管理 (Tenant User Administration)]の[統合 (Integration)]タブ ([管理 (Admin)]、[所属 (Organization)]、[テナント (Tenant)]、[ユーザー (Users)]、[ユーザーの選択 (Select User)]、[統合 (Integration)]の順に選択) で管理者ユーザーが変更
- テナントの[ユーザーメンテナンス (User Maintenance)]画面の[統合 (Integration)]タブ ([管理 (Admin)]、[ユーザー管理 (User Management)]、[ユーザーの選択 (Select User)]、[統合 (Integration)]の順に選択) でテナント管理者が変更
 - [NetBackup Adapter のアクセス権 (NetBackup Adapter Access Rights)]セクションで必要なアクセス権をクリックします。
 - [値 (Value)]フィールドで[有効 (Enabled)]または[無効 (Disabled)]を選択します。

[ユーザーによる上書き (By User override)]オプションは選択しないでください。

コンピュータの登録

使用するコンピュータは NetBackup Self Service に登録する必要があります。この要件には、NetBackup で使用するための UI および構成データの表示名が含まれます。

コンピュータの登録には、ユーザーインターフェース、APIを使用した方法、またはvCloud Director インポートで直接行う方法の 3 つがあります。単一のテナントにはコンピュータの複数のソースを含めることができます。たとえば、vCloud Director からインポートされた仮想マシンと API を使用してインポートされた物理コンピュータです。

ユーザーインターフェースを使用したコンピュータの登録

コンピュータを登録するには、ホームページの[コンピュータ]タブの [コンピュータを登録]から行います。データの完了をサポートするためにヘルプテキストを参照できます。入力中または[OK]をクリックしたときにフィールドのデータが正しいことが検証されます。

コンピュータ登録を削除するには、ホームページの[コンピュータ]タブに移動し、[登録の削除 (Remove Registration)]リンクを使用します。コンピュータ登録は編集できないため、変更が必要な場合はコンピュータ登録を削除し、再作成することをお勧めします。コンピュータ登録を再作成する場合、同じコンピュータコードを使用してください。

コンピュータ登録プロセスには、NetBackup からの保護データおよびイメージデータの自動更新が含まれます。保護データは、スケジュールまたは一回限りの今すぐバックアップタスクによって保護されている内容を示します。リストのコンピュータ行から [NetBackup データの更新 (Refresh NetBackup data)] をクリックすると、コンピュータの保護イメージとバックアップイメージを同期することができます。通常、同期に手動介入は不要です。例外は、新しい保護ポリシーからのイメージ、または手動で作成されたイメージをすぐに表示する場合です。

API を使用したコンピュータの登録

API は、コンピュータ詳細の自動インポートまたは一括インポートに使用できます。SDK はクライアントが .NET に書き込まれるようにし、API の推奨される使用方法です。ただし、REST API は Microsoft 環境外で使用可能です。

インストールディレクトリの SDK マニュアルを参照してください。

vCloud Director インポートによる登録

vCloud 階層を vCloud Director から自動的にインポートし、コンピュータを NetBackup Self Service に登録できます。インポートは、個別の資格情報を使用してテナントベースによりテナントで実行されます。

vCloud Director インポートでは、階層がインポートされる vCloud Director インスタンスを定義する必要があります。さらに、それと関連付ける NetBackup Self Service 設定を指定する必要があります。

インポートでは、インポートされる階層と関連付けられる [保護形式] と [場所] を指定する必要があります。

インポートではオプションで、仮想データセンター (vDC) フィルタリングを使用できます。vDC フィルタリングが有効になっている場合、フィルタの vDC のみがインポートされます。フィルタリングはテナントベースごとに発生し、vDC がインポートされるようにそれぞれをフィルタと設定する必要があります。各 vDC は単一テナントのフィルタでのみ表示される必要があります。

vDC フィルタリングが無効になっている場合、インポート資格情報によって表示されるすべての vDC がインポートされます。

新しい vCloud Director インポートを作成するには、[インポート] タブの [インポートを追加] オプションを使用します。画面のプロンプトに従って、対応する [vCloud インポート統合設定 (vCloud Import Integration Setting)] セクションを作成します。

インポートを有効にするには、テナントレベルでログオン資格情報を指定する必要があります。vCloud Director の資格情報は組織に対して定義され、[全般 (General)] > [管理者ビュー (Administrator View)] への権限がある必要があります。単一のテナントのみが vCloud Director 組織からコンピュータをインポートできます。

新しいテナントを作成する場合、テナント作成プロセスの一部として [テナントを追加] フォームで単一の vCloud Director システムに対する資格情報の指定がサポートされま

す。追加の資格情報は、API を使用するか、または [テナント] 管理の [統合設定] タブを使用して入力できます。最初のパスワードが設定されると、テナント管理者は vCloud Director へのアクセスに使用される vCloud Director パスワードを更新できます。テナント管理者は、コンピュータリストのルートノードのドロップダウンを使用してパスワードを更新します。

表 4-5 vCloud Director インポートで使用される統合設定

項目	詳細
vCloud Api	この値は、https://hostname/api/ 形式の vCloud Director API の URL に設定する必要があります。
場所	コンピュータが登録される NetBackup の場所の名前。
オンライン	vCloud Director インスタンスがオンラインとみなされるかどうかを示します。Self Service では、オンラインでないインスタンスは使用されません。
Ignore SSL Certificate Errors (SSL 証明書エラーを無視する)	このオプションを使用すると、Self Service で SSL 証明書が有効でない vCloud Director インスタンスに接続できるようになります。
vCloud ユーザー名	テナントが vCloud Director API への接続に使用するユーザー名。各テナントに独自の資格情報がある必要があります。userid@vOrg の形式にする必要があります。テナントレベルでのみ設定する必要があります。
vCloud パスワード	テナントの対応する vCloud Director パスワード。テナントレベルでのみ設定する必要があります。
保護形式コード	インポートされたコンピュータに適用される保護形式。
Use vDC Filter (vDC フィルタを使用する)	vDC フィルタリングを有効にするために設定します。
vDC フィルタ	インポート時に vDC に適用されるフィルタ。このフィルタはカンマ区切りのリストで、vDC 名は大文字と小文字が区別されます。テナントレベルでのみ設定します。

vCloud Director からインポートされるコンピュータが 2 つのペインのツリービューのテナントユーザーに表示されます。コンピュータが親コンテナ内に一覧表示されます。コンピュータが vCloud からの場合、コンテナは左のペインに表示されます。下位レベルの

テナンをクリックすると、内容が右のペインに表示されます。保護はコンテナレベルまたはコンピュータレベルで適用できます。非 vCloud Director コンピュータのみが登録されている場合、これらのコンピュータは全幅リストに表示されます。

ホームページの構成

ホームページはダッシュボードとして表示されます。この構成により、ユーザーはインベントリ (コンピュータ) の現在のステータスを表示し、マウスクリックだけでアクションを開始できるようになります。

テナントユーザービューは、ページの上部の 2 つの小さなサマリパネル、下部の全幅のパネルの 3 つのパネルとして表示されます。このビューは、[保護]ダッシュボードまたは [使用状況 (Usage)]ダッシュボードで、2 つのタブとして表示されます。上位のいずれかのパネルをクリックすると、メインパネルで内容が変更されます。これらのパネルは、ステータスパネル、使用状況パネルおよび保護パネルといいます。

非テナントまたは非管理者ビューには、すべてのテナントのコンピュータの合計として [ステータス]パネルが表示されます。ビューにはすべてのテナントの使用状況の合計として [使用状況 (Usage)]パネルが表示されます。非テナント管理者用のメインパネルには、概略ダッシュボード、構成タブ、監視タブ、テナントタブ別の使用状況が含まれます。

これらのパネルはインストールされ、完全に構成されていますが、設定はサービスカタログ ([管理 (Admin)]>[サービスカタログおよび通知 (Service Catalog and Notices)]>[サービスカタログ])の順で表示できます。各 [サービスカタログ]パネルは、[NetBackup Self Service Adapter]の URL、の [NetBackup Adapter]セクションの [統合設定パネル (Integration Setting Panels)] URL を参照できます。([管理 (Admin)]>[設定]>[統合設定])の順を参照できます。ユーザーグループレベルアクセス制御はここですが、通常、送信済みデータは変更されません。

ホームページの統合設定

表示される統合設定は、[状態 (Status)]および[使用方法 (Usage)]パネルの表示と内容に影響します。

[管理 (Admin)]、[設定 (Settings)]、[統合設定 (Integration Settings)]または[管理 (Admin)]、[所属 (Organization)]、[テナント (Tenant)]、[統合 (Integration)]の順に選択すると、関連する統合設定が表示されます。

表 4-6 NetBackup Adapter

項目	詳細
契約領域 (TB)	使用領域の表示を拡大し、テナントレベルで管理できます。

項目	詳細
使用状況保持期間 (月)	使用状況の傾向グラフやリストに表示しておく月数。

[アクションリクエストタイプ (Action Request Type)]では、次のコンピュータ処理に関連付けられたリクエストタイプを制御します。

表 4-7 アクションリクエストタイプ (Action Request Type) (詳細カスタマイズのみ)

項目	詳細
マシンを保護解除 (Unprotect machine)	カスタマイズしたリクエストタイプのリクエストタイプコード。デフォルトは DBREMBACK です。
VM のリストア	カスタマイズしたリクエストタイプのリクエストタイプコード。デフォルトは DBRESTVM です。
ファイルのリストア (Restore File)	カスタマイズしたリクエストタイプのリクエストタイプコード。デフォルトは DBRESTFILE です。
ファイルリストアを登録する (Register for File Restore)	カスタマイズしたリクエストタイプのリクエストタイプコード。デフォルトは DBREGDNS です。
DB 保護の登録をする	カスタマイズしたリクエストタイプのリクエストタイプコード。デフォルトは DBREGPROT です。
DB SQL のリストア	カスタマイズしたリクエストタイプのリクエストタイプコード。デフォルトは DBRESTSQL です。
DB Oracle のリストア	カスタマイズしたリクエストタイプのリクエストタイプコード。デフォルトは DBRESTORA です。

NetBackup Adapter のアクセス権は、すべてのユーザー、個々のテナント、または特定のユーザーがコンピュータに対して実行できる処理を制御します。

表 4-8 NetBackup Adapter アクセス権限

項目	詳細
今すぐバックアップを許可 (Allow Backup Now)	[今すぐバックアップ (Backup Now)]オプションを表示するかどうかを決めます。
マシンの保護を許可 (Allow Protect Machine)	[コンピュータを保護 (Protect Computer)]オプションを表示するかどうかを決めます。

項目	詳細
ファイルのリストアを許可 (Allow Restore File)	[ファイルのリストア (Restore File)]オプションを表示するかどうかを決めます。このオプションでは[フォルダのリストア (Restore Folder)]オプションも設定できます。
VM のリストアを許可 (Allow Restore Vm)	[VM のリストア (Restore Vm)]オプションを表示するかどうかを決めます。
マシンの保護解除を許可 (Allow Unprotect Machine)	[コンピュータを保護解除 (Unprotect Computer)]オプションを表示するかどうかを決めます。
使用状況レポートを許可 (Allow Usage Report)	ホームページに使用状況のレポートを表示するかどうかを制御します。
ファイルリストアの登録を許可 (Allow Register for File Restore)	[ファイルリストアを登録する (Register for File Restore)]オプションを表示するかどうかを決めます。
保護の登録を許可 (Allow Register for Protection)	[保護を登録する (Register for Protection)]オプションを表示するかどうかを決めます。
SQL のリストアを許可 (Allow Restore SQL)	バックアップが見つかった場合に[SQL データベースのリストア (Restore SQL Database)]オプションを表示するかどうかを決めます。
Oracle のリストアを許可 (Allow Restore Oracle)	バックアップが見つかった場合に[Oracle バックアップをリストア (Restore Oracle Backups)]オプションを表示するかどうかを決めます。

アクセス権について詳しくは、[テナントの構成 (Configuring Tenants)]セクションで参照できます。

p.24 の「テナントの構成」を参照してください。

[NetBackup Adapter の使用方法 (NetBackup Adapter Usage)]では、[使用方法 (Usage)]タブ内の機能を制御します。

表 4-9 NetBackup Adapter 使用方法

項目	詳細
通貨コード	表示する通貨記号 (計算なし)
コスト (GB あたり)	料金の計算に使用する GB あたりのコスト

項目	詳細
料金タイプ	料金計算の基準 (新しいバックアップ、使用容量、または基準を設定しない)。テナントレベルで管理が可能

Self Service のカスタマイズ

この章では以下の項目について説明しています。

- [言語設定](#)
- [リクエストフォームの作成またはカスタマイズ](#)
- [テーマ](#)
- [通知](#)

言語設定

ポータルでは複数の言語がサポートされていますが、NetBackup Self Service ソリューションデータは現在、英語 (米国) でのみ使用可能です。この設定には、日付形式を含む、言語および地域の設定が含まれます。

リクエストフォームの作成またはカスタマイズ

リクエストタイプはカスタマイズ可能ですが、通常の操作ではこのカスタマイズは不要です。標準装備になっているすべてのリクエストタイプは実装可能です。

メモ: 標準装備になっているリクエストフォームへの変更が必要な場合、まずそれをコピーしてから、そのコピーを必要に応じて編集できます。

NetBackup Self Service には、完全に事前構成されたリクエストフォーム (リクエストタイプ) が標準装備されています。これらのフォームは、バックアップオプションまたはリストアオプションがホームページダッシュボードから選択されると起動されます。追加のデータまたは統合が必要な場合、デフォルトのリクエストフォームをカスタマイズされたフォームへの関連付けで上書きできます。この上書きは、システム全体のレベルで有効になります。

カスタマイズはアップグレード時に上書きされる可能性があり、すべてのカスタマイズを再適用する必要があります。

標準装備されているリクエストフォームをリストから選択して、コピーする必要があります。フォームにアクセスするには、[管理 (Admin)]>[リクエストおよび承認 (Request and Approval)]>[リクエストタイプ]の順にを選択します。次に、追加のリクエストフィールド、承認ステージまたはワークフローを追加すると、[リクエストタイプアクティブ (Request Type Active)]チェックボックスが有効になります。[リクエストタイプ名 (Request Type Name)]が[リクエストリスト (Request List)]での表示に適したテキストに修正されることを確認します。

メモ: 標準装備されているリクエストフィールドまたはワークフロー手順は削除しないでください。この機能は、フルフィルメント手順または承認プロセスの追加方法として使用可能です。

関連する[アクションリクエストタイプ (Action Request Type)]設定を[統合設定]セクションから編集する必要があります。

- 1 [管理 (Admin)]>[設定]>[統合設定]の順にを選択して、設定にアクセスします。
- 2 既存の値を新しい[リクエストタイプコード (Request Type Code)]と置き換え、編集します。
- 3 次に、標準装備されているリクエストフォームを無効化できます。

メモ: サービスカタログ、標準装備されているリクエストタイプの完全リストは、デフォルト値へのリストアがリクエストされる場合に使用可能です。これらは、インストール場所の MsBuild¥RequestTypes フォルダにあります。

テーマ

事前に標準装備されている NetBackup Self Service テーマは調整可能です。テーマは管理領域画面で、使用される色、および多くのイメージとスタイルを編集して変更します。多くの要素が編集ページ別に編集可能です。[ページ幅 (Page Width)]は 1024 ピクセルのままにしておく必要があります。また、オンライン CSS エディタを使用して、追加のカスタマイズ編集を行うこともできます。

標準装備されているテーマをシステム幅に調整するには、[管理 (Admin)]>[設定]>[テーマ (Theme)]の順にを選択するか、個別のテナントの場合は[管理 (Admin)]>[組織]>[テナント]>[テーマ (Theme)]の順にを選択します。

通知

ホームページの最上部にニュースティッカースタイルで新しい通知を表示できます。警告タイプまたは情報タイプの通知を表示できます。通知のテーマを変更したり、テナントを基準に通知をフィルタリングすることもできます。通知の公開は開始日と終了日の両方で制御できます。API はこれらの通知をサポートします。

[管理者 (Administrator)] のアクセスプロファイルを設定しているテナントでは、組織の通知を管理できます。

ユーザー認証方法

この章では以下の項目について説明しています。

- [ユーザー認証方法について](#)
- [フォームベース認証](#)
- [Windows 認証](#)
- [Active Directory のインポート](#)
- [フェデレーションシングルサインオンを使用するための Self Service の設定](#)

ユーザー認証方法について

NetBackup Self Service では、次の 3 種類の方法でユーザーを認証できます。

- ユーザー名とパスワードを使用するフォームベース認証。この設定は、Self Service に用意されているデフォルトの設定です。
- Windows 認証 (任意で Active Directory をインポート)。このオプションは、企業で配備する場合にのみ適しています。
- WS-Federation パッシブプロトコルによるフェデレーションシングルサインオン。

フォームベース認証

Self Service ポータルには、ログオンページでユーザー ID とパスワードを入力してアクセスします。この設定は、システムにアクセスするデフォルトの方法です。他の設定は必要ありません。

パスワードのルールは[管理 (Admin)]、[設定 (Settings)]、[システム構成 (System Configuration)]の[パスワードポリシー (Password Policies)]カテゴリの順に選択して定義できます。

Windows 認証

Windows 認証を使用するには、ユーザーのドメイン名と合致するユーザー名を使用してデータベースでユーザーを設定する必要があります。形式は、**DOMAIN_NAME#username** または **username** にします。形式は、システム設定によって異なります。

[管理 (Admin)]、[設定 (Settings)]、[システム構成 (System Configuration)] で [ドメイン名の削除 (Remove Domain Name)] を設定します。*firstname.lastname* を使用する場合はスイッチをオンにして、*DOMAIN#firstname.lastname* を使用する場合はスイッチをオフにします。

Windows ユーザーが 1 人でも管理領域にアクセスすると、IIS で匿名認証とフォーム認証の両方が無効になります。Windows 認証を有効にします。IIS のこの設定により、*web.config* ファイルが更新されて **Self Service** のアドレスが更新に従って変更されます。

IIS で Windows 認証を設定するまでは、用意されている *admin* ユーザー ID を使用しないとシステムにアクセスできません。設定後は、手動ログオンは利用できません。

メモ: Active Directory を使用してユーザーを同期する場合は、初回インポート時に少なくとも 1 人のユーザーを *Supervisor* アクセスプロファイルに関連付けます。関連付けないと、管理領域に不正アクセスされます。

メモ: この操作はシステムの初回実装時の設定にのみ実行します。ログオンプロトコルに後で変更を加える場合には適していません。履歴データに影響を与えるからです。

Active Directory のインポート

Self Service と Active Directory を同期するとメンテナンスが簡単になります。インポートはスケジュール設定したインポートタスクで管理します。このプロセスで処理の時間や頻度を指定できます。ユーザーセットに含まれていないユーザーは **Self Service** で無効になっているので、スケジュールはすべてのユーザーセットに反映されます。

各プロファイルの異なるソースで複数のインポートプロファイルを作成できます。各プロファイルの **Self Service** のアクセスプロファイル、コストセンター、ユーザーアカウントの状態を指定する必要があります。ユーザーは 0 個以上のユーザーグループに自動的に割り当てられます。ただし、ユーザーグループがすでに **Self Service** に存在する必要があります。**Self Service** のユーザー名は、[氏名 (Full Name)] (デフォルト) または [表示名 (Display Name)] から取得できます。言語は選択できます。選択しない場合はシステムベースの言語を使用します。インポートプロファイルはグループまたは組織単位で指定できます。子を含めるかどうかも指定できます。

インポートプロファイルはリストの最上部から処理されるので、必要条件に合わせて順序を変更できます。複数のプロファイルに同一のユーザーが存在する場合は、処理する最新のプロファイルの[インポートユーザーフィールド (Imported User Fields)]のみが適用されます。すべてのプロファイルのユーザーグループメンバーシップが更新されます。

[Active Directory のインポート (Active Directory Import)]内で指定するユーザーは、ドメインのルートレベルで[内容の一覧表示 (List Contents)]と[すべてのプロパティの読み込み (Read All Properties)]の権限が必要です。これらの権利は、すべての組織単位や組織グループを検索してすべてのユーザーをインポートできるようにするために必要です。

インポートするときにユーザー ID の先頭にドメイン名を追加するかどうかをシステム構成設定で制御できます。[管理 (Admin)]、[設定 (Settings)]、[システム構成 (System Configuration)]の順に選択すると、システム構成設定を参照できます。1 つ目のユーザーアカウントを作成する前に、設定値が適切であることを確認してください。これ以降は、変更を加えると新しいユーザーアカウントが作成されて既存のアカウントは無効になり、履歴要求へのアクセスに影響を与えます。SAM アカウント名を変更すると、新しい Self Service のユーザーアカウントが作成されます。

Active Directory で管理していないレコードにローカルで管理している Self Service ユーザーを作成できます。Active Directory の更新では、これらのユーザーは無視されます。

メモ: Windows 認証を使用する場合は、初回インポート時に少なくとも 1 人のユーザーを Supervisor アクセスプロファイルに関連付けます。関連付けないと、管理領域に不正アクセスされます。

メモ: この操作は、システムの初回実装時の設定でのみ実行します。この操作は、ユーザー管理方法に影響を与えるので、後でログオンプロトコルに変更を加える場合は適しません。

フェデレーションシングルサインオンを使用するための Self Service の設定

Self Service では、WS-Federation パッシブプロトコルによるフェデレーションシングルサインオンをサポートします。Microsoft WIF (Windows Identity Foundation) とともに実装し、クレームの転送時に SAML (Security Assertion Markup Language) トークンを使用します。ただし、SAML2 プロトコル (SAML-P) はサポート外です。

Self Service をインストールするときに、最初のログオンで admin アカウントを使用する必要があるフォーム認証で設定します。

ID プロバイダを使用して認証するには:

- 1 **Self Service** のデータベースで、ID プロバイダのユーザーに対応するユーザーを作成します。
- 2 **Self Service** の `web.config` ファイルを編集してフェデレーションシングルサインオンを有効にします。

Self Service でのユーザーの作成

Self Service でユーザーを識別するには[ユーザー ID (User ID)]を使用します。ID プロバイダでユーザーを識別するには[クレーム (Claims)]を使用します。正常に認証するには、**Self Service** のユーザーが ID プロバイダのいずれかのクレーム値に一致するユーザー ID を所有している必要があります。

Self Service ユーザーを見つけるときに、**Self Service** は[名前 (Name)]、[電子メール (Email)]、[Windows アカウント名 (Windows Account Name)]、[UPN]を調べます。通常、[名前 (Name)]と[Windows アカウント名 (Windows Account Name)]では `domain¥username` の形式を使用し、[電子メール (Email)]と[UPN]では `username@domain` の形式を使用します。

ポータルでユーザーを入力することも、**Active Directory** から直接まとめてインポートしたり .csv ファイルを使用してインポートすることもできます。

web.config を編集してフェデレーションシングルサインオンを有効にする

`web.config` ファイルを変更してフェデレーションシングルサインオンを有効にするには:

- 1 `install_path¥WebSite` にアクセスします。
- 2 管理者としてメモ帳で `web.config` を開きます。
- 3 `<modules>` セクションを検索して 2 つの `IdentityModel` モジュールをコメント解除します。
- 4 `<authentication>` セクションを検索してモードを `None` に変更します。
- 5 `<wsFederation>` 要素の `issuer` 属性に **WS-Federation Web** サイトの URL を入力します。
- 6 `<trustedIssuers>` セクションを検索して **WS-Federation** サーバーのトークン署名証明書の拇印を入力します。

メモ: ファイルに隠し文字を挿入すると拇印の照合に影響を与える可能性があるため、拇印のカットアンドペーストは使用しないでください。

- 7 自己署名 SSL 証明書を使用するテストシステムでこれらの変更を加える場合は、`<certificateValidation>` 要素をコメント解除します。
- 8 `web.config` ファイルを保存します。

[フォーム認証 (Forms Authentication)]に切り替える必要がある場合は、`web.config` ファイルを編集して認証モードをフォーム `<authentication mode="Forms">` に設定できます。[フォーム認証 (Forms Authentication)]に切り替えると問題が解決することがあります。

Self Service へのログオン

フェデレーションログオン用にシステムを完全に構成していることを確認するには:

- 1 Internet Explorer を閉じて再び開きます。
- 2 Self Service の URL を入力します。
- 3 使用している環境でテスト証明書を使う場合は証明書エラーを 2 回容認します。
- 4 以前作成したユーザーの資格情報を入力します。ログオンに成功するはずですが。

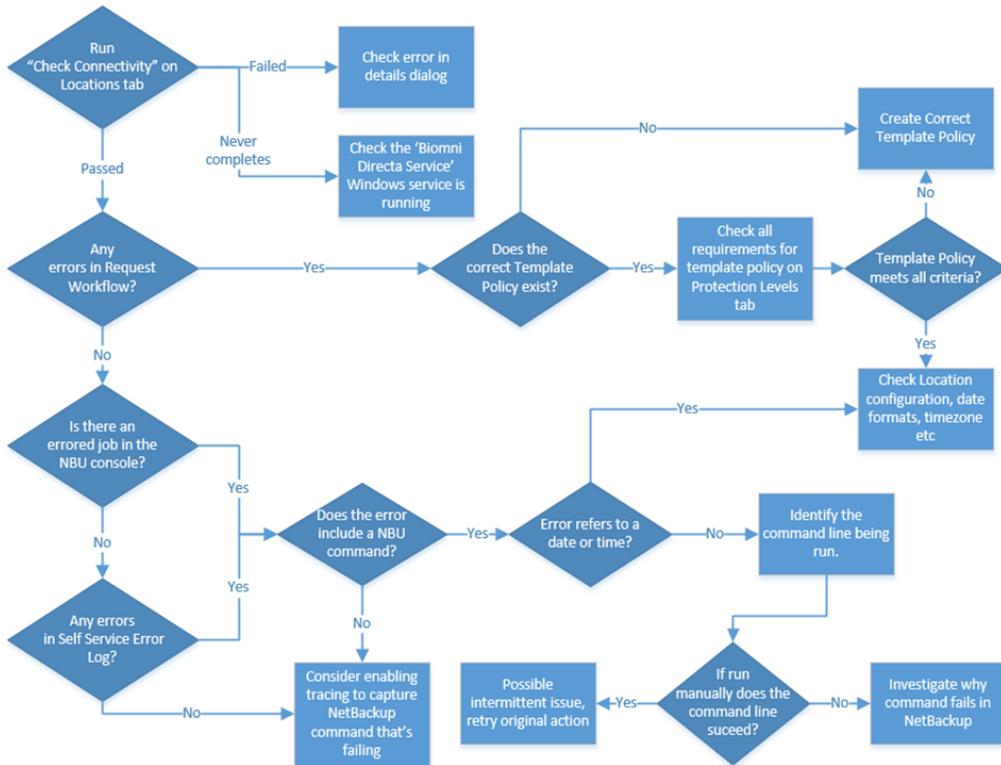
トラブルシューティング

この章では以下の項目について説明しています。

- [トラブルシューティングについて](#)
- [トラブルシューティング情報の参照場所](#)
- [テナントユーザーの偽装](#)
- [リモート PowerShell から Windows マスターサーバーまでの問題](#)

トラブルシューティングについて

問題のトラブルシューティングの最初のステップとして、その問題が **Self Service** または **NetBackup** 自体に関するものかどうかを判断します。方向性が明確なエラーまたは障害メッセージがない限り、最善の初回のアクションは、**NetBackup** コンソールでアクションを手動で実行してみることです。このアクションが失敗した場合、**NetBackup** に問題があることを示します。**NetBackup** に問題が認められない場合は、続けて **Self Service** を診断します。



トラブルシューティング情報の参照場所

接続性をチェックする

[場所]タブの[接続性をチェックする]アイコンを使用して、システム内の各マスターサーバーへの接続をテストします。エラーには赤いバツ印が表示され、これをクリックするとエラー情報が表示されます。

リクエストワークフロー

Self Service の一部のアクションにより、システム内でリクエストが作成されます。[リクエストトップ (Requests Top)]メニューから、トラブルシューティングの良い情報源となる可能性があるリクエストを見つけることができます。

表 7-1 タブ情報

タブ名	詳細
[フルフィルメント (Fulfillment)]タブ	失敗したステップは赤で、それらに対するエラーが含まれます。
[監査]タブ	アクションに対する進捗状況を表示し、NetBackup ジョブ ID を提供することもできます。

Self Service エラーログ

[管理 (Admin)]> [サポート]> [エラーログ]の順に移動して見つけます。

エラーにはシステム参照が含まれている可能性があります。これを使用して特定のリクエスト、次にアクションに結び付けることができます。

失敗した NetBackup コマンドを見つける場合、テキスト /bin または %bin の検索を実行すると便利です。

追加のアクティビティレポート

アクティビティレポートの追加のソースは、[管理 (Admin)]ホームページの[サポート]カテゴリにあります。このカテゴリには、統合ログ、監査ログ、電子メールログ、およびタスクキュー、電子メールキューへのアクセスが含まれます。[タスクキュー]は、特に有用な情報源です。さまざまなタブにはさまざまな状態の [タスクキュー]アクティビティが表示されます。[履歴]タブをフィルタし、[エラーで完了 (Completed With Errors)]の状態のタスクを表示できます。エラーのあるタスクは赤で強調表示されます。

NetBackup コマンドラインエラー

Self Service は、マスターサーバーのコマンドラインで NetBackup コマンドを実行することにより動作します。コマンド実行の問題は、Self Service のエラーに含まれます。これらのエラーを見つけることは、非常に有用です。NetBackup コマンドラインのエラーがある場合、コマンドをコピーし、それをマスターサーバーで手動で実行してください。この方法はトラブルシューティングに役立ちます。

NetBackup コンソールでエラーが発生したジョブ

特定されるジョブ ID に対して特に NetBackup アクティビティモニターでエラーをチェックします。

テンプレートポリシーのチェック

テンプレートポリシーを正しく機能するように特定の 방법으로構成する必要があります。ポリシーテンプレートをチェックする際は、[管理 (Admin)]の[保護レベル]タブを参照してください。テンプレートが保護レベルと対応する緑色のチェックマークを選択すると表示されるすべての条件を満たしていることを確認します。

同期エラー

MSP 管理ユーザーとしてコンピュータ詳細ポップアップに表示できます。

コンピュータに関する正しくない詳細

イメージまたは保護の詳細がコンピュータに対し正しいと思われない場合、コンピュータに[NetBackup データの更新 (Refresh NetBackup Data)]を実行します。

追跡

追跡は、より詳細なレベルで問題を分析するように構成できます。この方法は、より高度なトラブルシューティング方法です。この方法はサポートなしで行わないでください。

Services Site¥Logs および *Panels Site¥Logs* の **ReadMe.txt** を参照してください。

テナントユーザーの偽装

テナントユーザーを偽装して、テナントユーザーのホームページビューを表示したり、テナントユーザーのためにアクションを実行したりできます。

ホームページから、ログオンしたユーザー名にマウスを置くと、オプション[別のユーザーとして実行 (Act as another user)]が表示されます。このオプションを選択すると、ユーザーリストが表示されます。必要なテナントユーザーを選択すると、ホームページビューが表示されます。

リモート PowerShell から Windows マスターサーバーまでの問題

同時リモート PowerShell 接続制限

NetBackup マスターサーバーでは、リモート接続数が制限されています。サーバーのデフォルトは通常十分です。

使用量が大きなインストールでは、この制限を増やす必要がある場合があります。制限を超えると、次のエラーが発生する可能性があります。

```
NetBackup server name Connecting to remote server NetBackup server name failed with the following error message : The WS-Management service cannot process the request. The maximum number of concurrent
```

```
shells for this user has been exceeded. Close existing shells or raise the quota for this user. For more information, see the about_Remote_Troubleshooting Help topic.
```

制限を増やすには:

- 1 NetBackup マスターサーバーで、許可される接続数を決定するために表示される次の PowerShell コマンドを実行します。

```
Get-Item WSMan:¥localhost¥Shell¥MaxShellsPerUser
```

- 2 NetBackup マスターサーバーで、許可される接続数を増やすために表示される次の PowerShell コマンドを実行します。

```
Set-Item WSMan:¥localhost¥Shell¥MaxShellsPerUser interger_value
```

同時ユーザー操作の制限

この制限に達すると、次のようなエラーが表示されます。

```
RunCommand failed.
"C:¥Program Files¥Veritas¥NetBackup¥bin¥admincmd¥bpimagelist"
"-d" "03/02/2015 09:58:11" "-e" "03/02/2015 11:58:11"
"-json_compact"
Run-Process script threw exception:
Starting a command on the remote server failed with the following
error message : The WS- Management service cannot process the
request. This user is allowed a maximum number of 15 concurrent
operations, which has been exceeded. Close existing operations for
this user, or raise the quota for this user. For more information,
see the about_Remote_Troubleshooting Help topic.
```

Windows 2012 でのデフォルトは 1500、Windows 2008 R2 でのデフォルトは15 です。マスターサーバーで、この制限を増やすために表示される次のコマンドを実行します。

```
winrm set winrm/config/Service
@{MaxConcurrentOperationsPerUser="1500"}
```

PowerShell 接続プール

デフォルトで、Windows 場所では PowerShell 接続プールが使用されます。このオプションにより、マスターサーバーで PowerShell を呼び出したときのより高いスループットが可能になります。すべての呼び出しでコンピュータでの新しい実行領域の作成および破棄が要求されないため、高いスループットが実現されます。

設定

表 7-2 PowerShell 接続プールに使用される場所統合設定

名前	詳細
NetBackup 使用プール接続	接続プールの問題の場合、この設定を False に変更し、オフにすることができます。

名前	詳細
NetBackup 最小プールサイズ	プールで保持する実行領域の最小数
NetBackup 最大プールサイズ	プールで保持する実行領域の最大数

診断

診断追跡では、PowerShell 接続の作成、使用、廃棄に関する多くの情報が取得されます。

次の PowerShell スクリプトを使用して、マスターサーバーへの接続に関する情報を検索できます。

```
$machineName = 'master_server_machine_name'
$username = 'user_name_-_same_as_the_location_integration_setting'
$password = '<password>'

$connectionURI = ('http://{0}:5985/wsman' -f $machineName)

$securePassword = ConvertTo-SecureString $password -AsPlainText -Force
$credential = New-Object System.Management.Automation.PSCredential
($username, $securePassword)

$connections = Get-WSManInstance -ConnectionURI $connectionURI
-Credential $credential -ResourceURI shell -Enumerate #| where
{ $_.Owner -eq $username }

if($connections.length -eq 0) { "There are no remote PowerShell
connections" }

$connections | ForEach-Object {
    # To remove the connection, uncomment the line below
    # Remove-WSManInstance -ConnectionURI $connectionURI shell
    @{$ShellID=$_ShellID}

    $_
    "Owner: {0}" -f $_.Owner
    "HostName: {0}" -f (Resolve-DnsName $_.ClientIP | select
    -expand NameHost)
    "-----"
}
```

スケジュールされているタスクの監視

Self Service では、スケジュールされているタスクの多くがバックグラウンドで実行されます。これらのスケジュールされているタスクにより外部システム間のデータが同期され、ユーザーインターフェースが可能な限り最新のものに保たれます。これらのタスクのステータスおよびタイミングは、非テナント管理者ユーザーとしてログオンするとホームページの [監視 (Monitoring)] タブに表示されます。

特定のタスクの実行に問題がある場合、アクションの歯車は赤です。タスク名をクリックすると、[スケジュールされているタスクの詳細 (Scheduled Task Details)] ウィンドウが表示されます。このウィンドウにはエラーメッセージが表示され、トラブルシューティングプロセスに役立ちます。エラーを解決し、ドロップダウンの [今すぐ実行 (Run Now)] をクリックして、タスクを再実行できます。

[監視 (Monitoring)] タブの [アクティビティ] 領域に、アクションに対しキューに登録されたタスクが表示されます。このキューが 10 項目を超え、数分間にわたり変わる兆候がない場合、Self Service のメインタスクエンジンに問題がある可能性があります。Windows サービスが実行中であることを確認し、[管理 (Admin)]、>[サポート]、>[エラーログ] の順に選択してエラーをチェックしてください。

表 7-3 バックグラウンドタスクと説明

バックグラウンドタスク	説明
System Sync	前回実行以来の全ての Master Server からのバックアップ イメージをインポートします。古いバックアップ イメージの有効期限を期限切れにして使用量を計算します。このタスクはスケジュールで 1 日に一度実行されます。
System Update	バックアップイメージの同期やアクティブなリクエストの更新など、システム更新を実行します。このタスクはスケジュールで 1 分に一度実行されます。
VCloud Director Import	構成されているインポートに従って、vCloud Director からのコンピュータを同期します。このタスクはスケジュールで 1 日に一度実行されますが、手動で開始できます。

NetBackup ポリシータイプ

この付録では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup ポリシー形式のリスト](#)

NetBackup ポリシー形式のリスト

表 A-1 は、NetBackup で使用可能なポリシー形式と、関連付けられている ID のリストです。これらをポリシー形式の統合設定の作成時に使用する必要があります。

表 A-1 ポリシー形式および関連付けられている ID

ID	名前	NetBackup Self Service	バックアップ対象
0	標準	保護; ファイルのリストア	ポリシーテンプレートで定義。ポリシーのすべてのクライアントに適用。
2	FlashBackup-Windows	保護	ポリシーテンプレートで定義。ポリシーのすべてのクライアントに適用。
4	Oracle	保護 (クライアントベースのみ); データベースのリストア	クライアントに存在するスクリプトによって定義。
6	Informix-On-BAR	サポートされない	
7	Sybase	保護	クライアントに存在するスクリプトによって定義。
8	Ms-SharePoint	保護	ポリシーテンプレートで定義。ポリシーのすべてのクライアントに適用。
10	NetWare	サポートされない	
11	DataTools-SQL-BackTrack	サポートされない	

ID	名前	NetBackup Self Service	バックアップ対象
12	Auspex-FastBackup	サポートされない	
13	MS-WindowsNT	保護; ファイルのリストア	ポリシーテンプレートで定義。すべてのクライアントに適用。
14	OS/2	サポートされない	
15	MS-SQL-Server	保護 (クライアントベースのみ); データベースのリストア	クライアントに存在するスクリプトによって定義。
16	Ms-Exchange-Server	保護	ポリシーテンプレートで定義。ポリシーのすべてのクライアントに適用。
17	SAP	保護	クライアントに存在するスクリプトによって定義。
18	DB2	保護	クライアントに存在するスクリプトによって定義。
19	NDMP	保護	ポリシーテンプレートで定義。ポリシーのすべてのクライアントに適用。
20	Flashbackup	保護	ポリシーテンプレートで定義。ポリシーのすべてのクライアントに適用。
21	Split-Mirror	サポートされない	
22	AFS	サポートされない	
24	DataStore	サポートされない	
25	Lotus-Notes	サポートされない	
27	OpenVMS	サポートされない	
31	BE-MS-SQL-Server	サポートされない	
32	BE-MS-Exchange-Server	サポートされない	
34	ディスクステージング	サポートされない	
35	NBU_Catalog	サポートされない	
37	CMS_DB	サポートされない	
38	PureDisk Export	サポートされない	
39	Enterprise Vault	サポートされない	

ID	名前	NetBackup Self Service	バックアップ対象
40	VMware	保護 (インテリジェントポリシー); VM のリストア; ファイルのリストア	
41	Hyper-V	保護 (クライアントベース); VM のリストア; ファイルのリストア	
42	NBU-Search	サポートされない	

現時点では、コンピュータをスナップショット対応ポリシーで保護できません。この問題は既知の問題です。

ダッシュボード交通信号ステータスおよび使用状況

この付録では以下の項目について説明しています。

- [ダッシュボードの信号機の状態と使用方法について](#)
- [保護形式を設定したコンピュータ](#)
- [保護形式が設定されていないコンピュータ](#)
- [使用方法](#)

ダッシュボードの信号機の状態と使用方法について

ダッシュボードの状態を示すパネルには、既定の保護状態 (赤色、琥珀色、緑色) のコンピュータ数が表示されます。この色の算出は、保護形式を設定しているコンピュータによって異なります。

使用容量は、月別の合計量として表示されます。

テナントユーザーには、テナントの合計が表示されます。サービスプロバイダには、全資産を反映する合計が表示されます。

保護形式を設定したコンピュータ

ユーザーが保護形式に設定可能な保護レベルを選択すると、1 つ以上の NetBackup ポリシーにコンピュータが追加されます。Self Service で各ポリシーを認識するしきい値 (時間単位) が保持されます。コンピュータを追加した既知のポリシーすべてのしきい値を評価して、赤色、琥珀色、緑色のどの状態であるかを判断します。

表 B-1 保護形式を設定したコンピュータ

色 (Color)	コンピュータの状態
緑色 (Green)	保護レベルは適用されています。すべてのポリシーはしきい値内のバックアップです。
琥珀色 (Amber)	コンピュータに保護レベルは適用されていません。
赤色 (Red)	保護レベルは適用されていますが、1つ以上のポリシーにバックアップが存在しないか、または最新のバックアップがしきい値外です。

メモ: NetBackup ポリシーにコンピュータを指定していても保護レベルがわからない場合は、色の状態を判断するときにポリシーは考慮されません。

[今すぐバックアップ (Backup Now)]プロセスでのみ保護されているコンピュータの数は数えられず、保護済みであるとは表示されません。

保護形式が設定されていないコンピュータ

コンピュータに保護形式を設定していない場合、状態は常に琥珀色で表示されます。

使用方法

[使用方法 (Usage)]パネルは、使用容量の合計量と月別グラフの2つの部分に分かれています。

使用容量は、テナントに属する有効期限内のすべてのイメージから計算されます。使用容量は、GB 単位の絶対値またはテナントの領域を減算した容量に関する絶対値として示されます。減算した領域に関する使用容量を表示すると、合計量に対する割合 (%) と絶対量の両方の値が示されます。

NetBackup からのデータの同期

この付録では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup からのデータの同期について](#)

NetBackup からのデータの同期について

データを NetBackup から Self Service に同期する場合、2 つの異なるプロセスが必要です。プロセスを以下に示します。

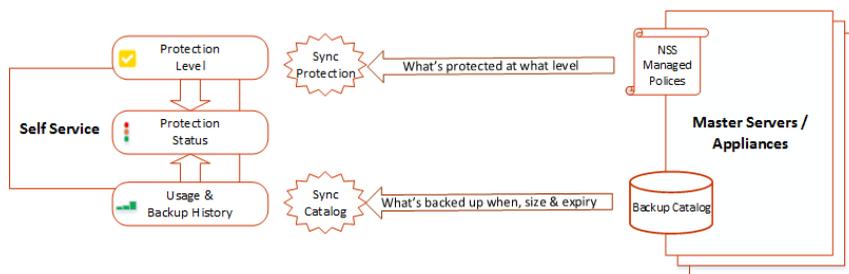


表 C-1 同期プロセスと関連詳細

同期プロセス	詳細
同期保護	<ul style="list-style-type: none">■ 保護レベルが構成されている場合にのみ同期。たとえば、ポリシーを管理する Self Service です。■ NetBackup 上のポリシーでクライアントコンピュータを検索します。■ コンピュータまたはコンテナに対し保護レベルを表示します (色が付いたチェックマークのアイコン)。■ Self Service では、保護要求の追加および削除により、ローカルキャッシュが最新の状態に保たれます。■ [管理]パネルで手動で起動可能です。
同期カタログ	<ul style="list-style-type: none">■ バックアップカタログを同期し、すべてのアクティブなイメージの詳細を Self Service に転送します。■ 構成可能なバッチサイズで実行される初期インストール後完全同期。■ 通常のタスクでは、日次増分同期によって Self Service でレコードが最新の状態に保たれます。■ イメージレコードは、Self Service インベントリのコンピュータと一致します。■ Self Service では、概略のダッシュボードに対し夜間ベースでコンピュータおよびテナントごとにイメージサイズデータがロールアップされます。■ 個別のコンピュータのイメージは、今すぐバックアップリクエスト完了時、または管理者が管理パネルで手動で初期化するときに再同期されます。

NetBackup Self Service データキャッシュプロセス

この付録では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup Self Serviceのデータキャッシュ処理](#)
- [NetBackup データの同期](#)
- [今すぐバックアップ](#)
- [コンピュータの保護](#)
- [コンピュータを保護解除](#)

NetBackup Self Serviceのデータキャッシュ処理

NetBackup Adapter は、コンピュータ、保護、バックアップイメージに関するデータをキャッシュするのでパフォーマンスが向上します。

スケジュール設定したタスクを定期的に行ってデータを最新の状態に保ちます。スケジュール設定するタスクを次に示します。

- システムの同期 (System Sync)
 - 前回の実行以降に作成されたバックアップイメージをすべてのマスターサーバーからインポートする
 - 古いバックアップイメージを期限切れにする
 - 使用量を計算する
 - 信号機の状態を計算する
 - デフォルトで、毎日午前 12 時 15 分 (UTC) に実行する
- システム更新 (System Update)

このタスクでは、**NetBackup** データの同期するようにフラグを付けたコンピュータを処理します。保護レベルとバックアップイメージをインポートして、信号機の状態を再計算します。デフォルトでは、毎分実行します。

- **vCloud Director のインポート (vCloud Director Import)**
構成されているインポートに従って、**vCloud Director** からのコンピュータを同期します。このタスクは、デフォルトでは毎日午前 12 時 30 分 (UTC) に 1 回実行しますが、手動で開始することもできます。

システムの同期

- すべてのオンラインの場所から過去 1 日間のイメージをインポートします。前回のシステム同期時に開始したものの完了しなかったバックアップを取得するために、24 時間分重複してインポートします。
- 期限切れのイメージにフラグを付けます。
- 前回のバックアップを更新して信号機の状態を計算します。

メモ: 新しい場所を追加すると、システムで処理が個別にトリガされません。バックアップイメージの取得やポリシーのインポートのような新しい同期または進行中の同期にこの新しい場所の追加が導入されました。古いイメージは手動でしかインポートできません。**[NetBackup データの更新 (Refresh NetBackup Data)]**をクリックするか、または **API** を呼び出して古いイメージをインポートします。バックアップを設定しているすべてのコンピュータでこの処理が必要です。

統合設定

一覧表示されている統合設定は次のシステム同期に関係があります。

- **使用状況の保持期間 (月単位) (NetBackup Adapter 統合セクション)**
グラフに使用状況データと期限切れのバックアップイメージを保持する期間と月数が表示されます。この期間が終了すると、使用状況データと期限切れのイメージはシステムの同期で削除されます。

NetBackup データの同期

コンピュータをインポートするときに、**[NetBackup データの更新 (Refresh NetBackup Data)]**をクリックするか、または **API** で `SyncNetBackupData` を呼び出してコンピュータに同期のフラグを付けます。この操作はコンピュータの同期が可能であるとマーク付けするので、システム更新でこのコンピュータが選択されます。この処理は保護とイメージをインポートし、信号機の状態を再計算します。

タスクでは、5 分間に 100 台のコンピュータをまとめて処理するか (デフォルト)、またはインポートが必要なコンピュータが存在しなくなるまで処理します。最も前に追加したコンピュータを最初に処理します。最初はすべてのコンピュータが同じ優先度ですが、[今す

ぐバックアップ (Backup Now)]を実行すると、これを実行したコンピュータは高優先度にマーク付けされます。

同期に失敗すると、同期は一定期間ロックされます。ロックされても、エラーがない他のコンピュータは処理できます。

統合設定

一覧表示される統合設定は次の NetBackup データの同期に関係があります。

- イメージのインポートのバッチ処理 (分単位) (NetBackup Adapter 統合セクション)
同期のマークが付いたコンピュータがある場合はシステム更新で一定期間データを取得します。デフォルトでは 5 分に設定されています。
- イメージのインポートのロック待機 (分単位) (NetBackup Adapter 統合セクション)
この値は、イメージの取得に失敗した場合にコンピュータのイメージの同期をロックする期間を定義します。デフォルトでは 60 分に設定されています。

今すぐバックアップ

[今すぐバックアップ (Backup Now)]リクエストが完了すると、コンピュータに高優先度の同期であることを示すフラグが付くので、コンピュータは可能な限り早く新しいイメージを同期します。

コンピュータの保護

[コンピュータを保護 (Protect Computer)]リクエストが完了すると、タスクをキューに入れて保護レベルをデータベースに追加し、信号機の状態を更新します。

コンピュータを保護解除

[コンピュータを保護解除 (Unprotect Computer)]リクエストが完了すると、タスクをキューに入れてデータベースから保護レベルを削除し、信号機の状態を更新します。

統合設定

この付録では以下の項目について説明しています。

- [統合設定について](#)
- [NetBackup Adapter](#)
- [NetBackup Adapter 使用方法](#)
- [NetBackup Adapter アクセス権限](#)
- [アクションリクエストタイプ](#)
- [NetBackup 場所](#)
- [vCloud Director のインポート](#)

統合設定について

統合設定は、NetBackup Self Service と NetBackup の間の統合を構成するために使用されます。個別の設定はセクション内でグループ化され、[管理 (Admin)]>[設定]>[追加 (More)]>[統合設定]の順でアクセスします。このセクションには、NetBackup Self Service ソリューションに関連する統合設定の完全リストが含まれます。個別のセクションまたは設定は、マニュアル全体の該当する機能領域で参照されます。

一部の設定では[テナントの上書きを許可 (Allow Tenant Override)]が[はい]に設定されています。これらの構成は通常テナントベースごとに構成する必要があり、上位レベルの統合設定では正常に完了されません。代わりに、特定のテナントに関する詳細下で構成されます。NetBackup Adapter アクセス権限設定にもユーザー上書きのオプションがあります。([システム全体 (System wide)]>[テナント]>[ユーザー]の順)があります。アクセス権限に関する詳細を参照できます。

p.26 の「[アクセス権](#)」を参照してください。

上書き設定がシステム全体の統合設定に対して自動的に作成された値から手動で変更される場合、その新しい値は無視されます。

テナントレベル統合設定のほとんどはホームページから悪性されますが、[管理 (Admin)] > [組織] > [テナント] の各テナントレコードの別個のタブでも編集されます。テナント内からアクセスすると、テナントレベルで編集可能な設定のみが使用可能です。

事前に標準装備されている統合設定セクションは次のとおりです。

表 E-1 統合設定の事前設定

設定	詳細
NetBackup Adapter	このセクションでは、ソリューション全体に影響する設定が保持されます。次のセクションのうち 1 つのみがある必要があります。
NetBackup Adapter 使用方法	このセクションでは、ホームページの[使用方法 (Usage)]パネルのデータと計算が管理されます。次のセクションのうち 1 つのみがある必要があります。
NetBackup Adapter アクセス権限	このセクションでは、ソリューションで許可されるバックアップおよびリストアのアクションが決定されます。次のセクションのうち 1 つのみがある必要があります。
アクションリクエストタイプ	このセクションでは、特定の送信済みリクエストタイプの上書きがサポートされます。次のセクションのうち 1 つのみがある必要があります。

[場所を追加]フォームまたは[vCloud Director インポートを追加]フォームの完了から生成される統合設定セクションは次のとおりです。

表 E-2 生成される統合設定

設定	詳細
NetBackup 場所 <i>location</i>	このタイプのセクションには、NetBackup マスターサーバーに接続するための詳細が含まれています。複数の NetBackup 場所セクションが指定可能です (マスターサーバーごとに 1 つ)。
vCloud インポート <i>import</i>	このタイプのセクションには、vCloud Director インスタンスの詳細が含まれています。コンピュータはここからインポートされ、このセクションではインポートされたコンピュータと関連付けられている Self Service 場所が決定されます。個別のテナント資格情報は、テナントに対して指定されます。複数の vCloud Director インポートセクションを指定できます。詳細情報が利用可能です。 p.28 の「コンピュータの登録」を参照してください。

NetBackup Adapter

このセクションでは、ソリューション全体に影響する設定が保持されます。次のセクションのうち 1 つのみがある必要があります。

表 E-3 NetBackup Adapter 設定

設定	テナント 上書き	詳細
Report Customer Root	はい	このテナントのレポートが保存される Web サーバー上のフォルダのパス。
レポートファイル拡張子	いいえ	拡張子のセミコロン区切りリストを指定できます。
契約領域 (TB)	はい	使用に合意された領域の合計量 (TB)。 オプションの値; 設定されると、テナントレベルで通常構成
使用状況保持期間 (月)	いいえ	履歴ロールアップデータがホームページ使用状況グラフおよび表に表示するために保持される月数。
パネル URL	いいえ	NetBackup Adapter パネルの URL。この値は最初にインストーラによって設定されます。
サービス URL	いいえ	NetBackup Adapter Web サービスの URL。この値は最初にインストーラによって設定されます。
イメージインポートバッチ処理 (分)	いいえ	コンピュータイメージロードでは、コンピュータが同期にマークされている間の期間のイメージが取得されます。この値のデフォルトは 5 分です。
イメージインポートロック遅延 (分)	いいえ	この設定により、イメージ取得時にエラーが発生した場合にコンピュータに対してコンピュータ同期をロックする期間が決定されます。デフォルトは 60 分です。

NetBackup Adapter 使用方法

このセクションでは、ホームページの[使用方法 (Usage)]パネルのデータと計算が管理されます。次のセクションのうち 1 つのみがある必要があります。

表 E-4 アダプタ設定

設定名	テナント 上書き	詳細
通貨コード	はい	料金列の数値を識別するためにホームページ使用状況リストで使用される省略形の通貨コード。
コスト (GB あたり)	はい	料金の計算に使用される GB あたりのコスト。

設定名	テナント 上書き	詳細
料金タイプ	はい	料金が新しいバックアップまたは使用領域を表すのかどうか、または計算が行われないかどうかに関する基本パラメータ。 オプション: 新規バックアップ、使用容量、またはなし。

NetBackup Adapter アクセス権限

リストされているコンピュータに対しホームページから使用可能なアクションを決定します。アクションはシステム全体で、特定のテナント用、または個別のテナントユーザー用です。アクションは次のとおりです。

- 今すぐバックアップ
- マシンを保護
- ファイルのリストア (Restore File)
- VM のリストア
- マシンを保護解除 (Unprotect machine)
- ファイルリストアを登録する (Register for File Restore)
- 保護の登録をする
- SQL のリストア
- Oracle のリストア

このセクションでは、ホームページ[使用状況グラフ (Usage graph)]および[使用状況リスト (Usage list)]の管理も可能です。

次のセクションのうち 1 つのみがある必要があります。

表 E-5 NetBackup Adapter アクセス権限

設定名	テナント 上書き	詳細
今すぐバックアップを許可 (Allow Backup Now)	はい	この値をユーザーレベルで上書きするには、ドロップダウンから [for user] を選択します。この表の後の「注意」を参照してください。
マシンの保護を許可 (Allow Protect Machine)	はい	この値をユーザーレベルで上書きするには、ドロップダウンから [for user] を選択します。この表の後の「注意」を参照してください。

設定名	テナント 上書き	詳細
ファイルのリストアを許可 (Allow Restore File)	はい	この値をユーザーレベルで上書きするには、ドロップダウンから [for user] を選択します。この表の後の「注意」を参照してください。
VM のリストアを許可 (Allow Restore Vm)	はい	この値をユーザーレベルで上書きするには、ドロップダウンから [for user] を選択します。この表の後の「注意」を参照してください。
マシンの保護解除を許可 (Allow Unprotect Machine)	はい	この値をユーザーレベルで上書きするには、ドロップダウンから [for user] を選択します。この表の後の「注意」を参照してください。
使用状況レポートを許可 (Allow Usage Report)	はい	この値をユーザーレベルで上書きするには、ドロップダウンから [for user] を選択します。この表の後の「注意」を参照してください。
ファイルリストアの登録を許可 (Allow Register for File Restore)	はい	この値をユーザーレベルで上書きするには、ドロップダウンから [for user] を選択します。この表の後の「注意」を参照してください。
保護の登録を許可 (Allow Register for Protection)	はい	この値をユーザーレベルで上書きするには、ドロップダウンから [for user] を選択します。この表の後の「注意」を参照してください。
SQL のリストアを許可 (Allow Restore SQL)	はい	この値をユーザーレベルで上書きするには、ドロップダウンから [for user] を選択します。この表の後の「注意」を参照してください。
Oracle のリストアを許可 (Allow Restore Oracle)	はい	この値をユーザーレベルで上書きするには、ドロップダウンから [for user] を選択します。この表の後の「注意」を参照してください。

メモ: システム全体またはテナントレベルフラグのみを設定することをお勧めします。テナントユーザーレベルでの上書きは、システム全体設定が[有効]に設定されている場合のみ考慮されます。

テナントの構成についての詳しい情報を参照できます。

p.24 の「[テナントの構成](#)」を参照してください。

アクションリクエストタイプ

このセクションでは、特定の送信済みリクエストタイプの上書きがサポートされます。次のセクションのうち 1 つのみがある必要があります。

標準装備されているリクエストタイプ詳細を変更する場合、まず標準装備されているリクエストタイプのコピーを作成します。次に、新しいリクエストタイプを必要に応じて修正します。完了したら、新しいリクエストタイプを有効化し、このセクションを新しいリクエストタイプコードで更新できます。次に、標準装備されているリクエストタイプを無効化できます。

表 E-6 アクションリクエストタイプ

設定名	テナント 上書き	詳細
DB VM のリストア	いいえ	VM のリストアダッシュボードオプションと関連付けられているリクエストタイプコード。デフォルトは DBRESTVM です。
DB ファイルのリストア	いいえ	ファイルのリストアダッシュボードオプションと関連付けられているリクエストタイプコード。デフォルトは DBRESTFILE です。
DB マシンを保護解除	いいえ	マシンを保護解除ダッシュボードオプションと関連付けられているリクエストタイプコード。デフォルトは DBREMBACK です。
DB ファイルリストアを登録する	いいえ	ファイルリストアを登録するダッシュボードオプションと関連付けられているリクエストタイプコード。デフォルトは DBREGDNS です。
DB 保護の登録をする	いいえ	保護の登録をするダッシュボードオプションと関連付けられているリクエストタイプコード。デフォルトは DBREGPROT です。
DB SQL のリストア	いいえ	SQL データベースのリストアダッシュボードオプションと関連付けられているリクエストタイプコード。デフォルトは DBRESTSQL です。
DB Oracle のリストア	いいえ	Oracle バックアップのリストアダッシュボードオプションと関連付けられているリクエストタイプコード。デフォルトは DBRESTORA です。

NetBackup 場所

このセクションタイプには、NetBackup マスターサーバーに接続するための詳細が含まれています。複数の NetBackup 場所セクションが指定可能です (マスターサーバーごとに 1 つ)。

表 E-7 マシン場所

設定	テナント 上書き	詳細
NetBackup サーバー	いいえ	この場所用 NetBackup マスターサーバー
オンライン	いいえ	マスターサーバーがオンラインとみなされるかどうかを示します。オンラインでない場所では使用されません。ユーザーはブロックされ、場所に影響するアクションを行うことができなくなります。計画メンテナンスまたは停止の場合に使用されます。
NetBackup ユーザー名	いいえ	NetBackup マスターサーバーに接続するユーザー名。
NetBackup パスワード	いいえ	NetBackup サーバーへの接続用パスワード。公開鍵認証を使用する場合、このパスワードはユーザーの秘密鍵を解読するためのパスフレーズとして使用されます。
NetBackup フォルダ	いいえ	NetBackup コマンドがインストールされている NetBackup マスターサーバー上の場所。デフォルトの値は次のとおりです。 C:¥Program Files¥Veritas¥NetBackup (Windows の場合) /usr/openv/netbackup (UNIX の場合)
NetBackup OS	いいえ	NetBackup サーバーのオペレーティングシステム。
NetBackup タイムゾーン	いいえ	Self Service NetBackup Adapter と NetBackup マスターサーバーのサーバータイムゾーンが同じ場合、タイムゾーンを構成する必要はありません。 タイムゾーンを編集する必要がある場合、値を正しい Microsoft Time Zone ID に設定します。この ID は、ホームページの[場所を追加]の[サーバータイムゾーン (Server Time Zone)]ドロップダウンの[タイムゾーン]名に追加されています。
NetBackup 日付形式	いいえ	マスターサーバーで日付が表示される形式を指定します。 MM¥/dd¥/yyyy p.18 の「場所の構成」を参照してください。
NetBackup 日付時刻形式	いいえ	マスターサーバーで日付と時刻が表示される形式を指定します。 MM¥/dd¥/yyyy HH¥:mm¥:ss p.18 の「場所の構成」を参照してください。

設定	テナント 上書き	詳細
NetBackup OpenSSH 鍵	いいえ	公開鍵認証で UNIX マスターサーバーに接続する場合。 鍵は OpenSSH 形式である必要があります。
NetBackup インタラク ティブパスワードプロンプ ト	いいえ	キーボードインタラクティブ認証を使用する場合の UNIX マスターサーバーへの接続用。この値は、サーバーでパ スワードの入力が必要な場合に送信されるプロンプトと一 致します。デフォルトの値は Password: です。
NetBackup 使用プール 接続	いいえ	Windows マスターサーバーのみ。デフォルトでオン。通常 使用にはオンのままにしておく必要があります。マスター サーバーへの PowerShell 接続のプールを管理します。
NetBackup 最小プール サイズ	いいえ	Windows マスターサーバーのみ。サポート目的にのみ使 用されます。
NetBackup 最大プール サイズ	いいえ	Windows マスターサーバーのみ。サポート目的にのみ使 用されます。
時間単位のバックアップ チャンクサイズの取得	いいえ	Self Service で NetBackupからのコンピュータバックアッ プイメージが同期される場合、イメージはこのサイズのバツ チで取得されます。デフォルトは 25 ですが、多くのバック アップアクティビティがあるビジー状態のシステムの場合は その値を減らす必要があることがあります。数値を減らす と、指定された数のイメージを取得するために NetBackup への呼び出しが多くなります。取得される合計イメージは 同じままです。
最大バックアップ期間 (時間)	いいえ	NetBackup でバックアップにかかる最大時間(時間単位)。 バックアップイメージの同期時のバッファ期間を推定する ために同期エンジンで使用。この値は、同期問題が発生 した場合にのみ変更する必要があります。
NetBackup 認証メカニ ズム	いいえ	Windows マスターサーバー: Credential Security Support Provider (CredSSP) 認証を有効にするには、[Default] または [Credssp] に設定します。 UNIX または Linux マスターサーバー: [Password]、 [KeyboardInteractive]、または [PublicKey] に設定しま す。

メモ: 日付と時刻形式の編集についての詳しい情報を参照できます。

<https://msdn.microsoft.com/en-us/library/8kb3ddd4%28v=vs.110%29.aspx>

vCloud Director のインポート

この種のセクションには、特定の vCloud Director インスタンスからコンピュータをインポートして NetBackup Self Service に登録できるようにする vCloud Director のインポートプロセスの詳細が記載されています。個々の資格情報を使用するテナントベースでテナントにコンピュータをインポートします。vCloud Director インポートセクションは複数あります。

表 E-8

設定名	テナントの上書き	詳細
vCloud Api	いいえ	この値は、 <code>https://hostname/api/</code> 形式の vCloud Director API の URL に設定する必要があります。
場所	いいえ	コンピュータが登録される NetBackup の場所の名前。
オンライン	いいえ	vCloud Director インスタンスがオンラインとみなされるかどうかを示します。Self Service では、オンラインでないインスタンスは使用されません。
Ignore SSL Certificate Errors (SSL 証明書エラーを無視する)	いいえ	このオプションを使用すると、Self Service で SSL 証明書が有効でない vCloud Director インスタンスに接続できるようになります。
vCloud ユーザー名	はい	テナントが vCloud Director API への接続に使用するユーザー名。各テナントに独自の資格情報がある必要があります。userid@vOrg の形式にする必要があります。テナントレベルでのみ設定する必要があります。
vCloud パスワード	はい	テナントの対応する vCloud Director パスワード。テナントレベルでのみ設定する必要があります。
保護形式コード	いいえ	インポートされたコンピュータに適用される保護形式。

REST API

この付録では以下の項目について説明しています。

- [REST API について](#)

REST API について

REST API は、コンピュータの追加、保護、リストアなど、システムに対する管理処理と操作処理の両方をサポートします。

API のマニュアルはインストールディレクトリの SDK フォルダに入っています。API のマニュアルはオンラインでも参照できます。URL は、SDK ディレクトリの `ReadMe.txt` ファイルで参照できます。

用語集

この付録では以下の項目について説明しています。

- [用語集](#)

用語集

表 G-1 用語集

用語	定義
今すぐバックアップ	マスターサーバーで一時ポリシーを作成し、それを即時バックアップ用にスケジュールする Self Service のユーザーアクション。テンプレートポリシーは後で削除されます。
コンピュータ	ソリューションで認識される物理コンピュータまたは仮想コンピュータ。
顧客コード	NetBackup Self Service のテナントを特定するために使用される一意のコード。このコードは、 NetBackup のポリシー命名規則に使用されます。
イメージ同期	Self Service でコンピュータバックアップに関する情報が NetBackup から収集されるプロセス。
統合設定	統合設定は、 Self Service ポータルで保持される値によって名前が付けられた設定のフレキシブルなストアです。すべての統合設定には、管理者ユーザーとして[管理 (Admin)]>[設定]>[統合設定]からアクセスできます。統合設定がテナントレベルの例外で構成されている場合、[管理 (Admin)]>[組織]>[テナント]>[統合]からアクセスできます。
場所	場所は、 NetBackup マスターサーバーへの接続を示します。
マシン	ソリューションで認識される物理マシンまたは仮想マシン。
NetBackup Self Service	ソリューション全体を説明するために使用される用語。

用語	定義
NetBackup Self Service アダプタ	NetBackup との通信を行う Self Service システムの 2 番目の部分。
NetBackup Self Service ポータル	Self Service システムの最初の部分で、ソリューションのメインの Web サイト。
パネル	Self Service ポータルのホームページのサブ領域。ホームページウィジェットと呼ばれる場合もあります。
保護 (コンピュータ)	コンピュータを NetBackup ポリシーに追加して、定期的なバックアップをスケジュールする Self Service でのユーザーアクション。
保護レベル	保護レベルは、コンピュータに適用可能な保護のレベルを示します。保護レベルを構成することにより、ユーザーは NetBackup ポリシーに対して自分でスケジュールしたバックアップを保持できます。これは、各 NetBackup マスターサーバー上のテンプレートポリシーにマップされません。
保護形式	保護形式により、コンピュータを保護できるすべての方法が定義されます。この保護は、単一の保護レベル、または物理コンピュータと仮想コンピュータが混在する場合などは複数の保護レベルによって行うことができます。スケジュールされた保護と 1 回限りのバックアップには、異なる保護レベルが必要になります。
NetBackup データの更新	イメージデータ、保護データ、および信号を再構築するためのコンピュータレベルの手動プロセスまたは自動プロセス。
マシンの登録	テナントのコンピュータに関する情報で Self Service システムを更新するために使用されるプロセス。
ファイル/フォルダのリストア	NetBackup でファイルまたはフォルダをリストアするジョブを作成する Self Service のユーザーアクション。
VM のリストア	NetBackup で仮想マシンをリストアするジョブを作成する Self Service のユーザーアクション。
サービスカタログ	Self Service ポータルのユーザーに表示されるホームページ。[管理 (Admin)]>[サービスカタログ & 通知 (Service Catalog & Notices)]>[サービスカタログ]から編集できます。
サービスプロバイダ	Self Service システムを管理する最上位の組織を指します。
テンプレートポリシー	ユーザーに対し有効なポリシーを作成するために使用されるマスターサーバー上の無効な NetBackup ポリシー。
テナント	ユーザーの組織グループ。企業シナリオ内のビジネスユニット、またはサービスプロバイダの顧客として使用されることがあります。ユーザーはすべてテナント内にある必要があります。

用語	定義
保護解除 (コンピュータ)	コンピュータが NetBackup ポリシーから削除される Self Service のユーザーアクション。
vCloud Director のインポート	vCloud Director からの自動インポートを許可するコンピュータソース。
Web サービス	ポータル用 API を使用して、テナント、ユーザーなどの追加を自動化できます。 DAPI と呼ばれることもあります。